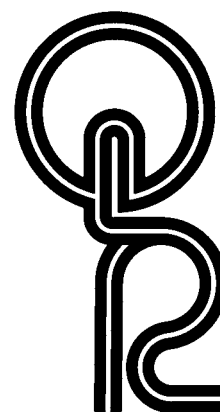


# QR Newsletter



## 第四紀通信

Vol. 31 No.4, 2024



令和6年能登半島地震で隆起した能登半島北西部（輪島市門前町深見）の海岸地形。この付近では、地震に伴って約5mの海岸隆起が生じたことが報告されている。岩礁に付着していた藻類が乾燥してしまい、海岸一面が白く見えている。（2024年4月 吾妻 崇撮影）

Vol. 31 No. 4

November 1, 2024

2024年大会開催報告..... 2	執行部会議事録..... 16
2024年大会若手・学生発表賞受賞者 報告..... 3	評議員会議事録..... 20
2024年大会巡検参加報告..... 3	総会議事録..... 21
2025年大会案内（第1報）..... 7	【重要】会費に関するお知らせ..... 39
JpGU2025案内（第1報）..... 7	役員選挙に向けての領域変更手続き .. ..... 39
学会賞等受賞者の言葉..... 8	会員消息..... 40
学会賞・論文賞等推薦のお願い..... 14	

## ◆日本第四紀学会 2024 年大会報告

報告：2024 年大会実行委員会

日本第四紀学会 2024 年大会は、東北大学大学院理学研究科との共催で、2024 年 8 月 29 日から 9 月 2 日に仙台市青葉区の東北大学青葉山北キャンパスにて開催されました。大会直前から期間中にかけて台風 10 号（サンサン）に翻弄されましたが、一般研究発表を急遽、対面とオンラインのハイブリッドに切り替えるなどして、無事にすべてのプログラムを実施することができました。会場には約 110 名が来場し、オンラインも含め 136 名の参加者（参加登録のみも含む）となりました。

8 月 29 日は午前アウトリーチ巡検、午後には評議員会が開かれました。アウトリーチ巡検の参加者は学生 2 名で、蒸し暑い中、はじめに川内キャンパスを流れる千貫沢および沢沿いの地層を見学した後、終点の東北学院大学五橋キャンパスを目指しました。

8 月 30・31 日には青葉サイエンスホールおよびロビーにて、一般研究発表（口頭発表 31 件、ポスター発表 22 件）がおこなわれ、活発な議論が展開されました（写真 1、2）。一般研究発表のうち約 4 割が若手や学生による発表でした。また、多目的室では複数の企業による展示がおこなわれました。31 日の午後には、総会・授賞式を実施しました。総会では正会員の会費に関して、院生・学生の会費を 2,000 円に引き下げること、65 歳以上の会員で 50,000 円を一括納入した場合については毎年の会費を徴収しないこと、が承認されました。懇親会は、東北大学附属図書館北青葉山分館と合わせて改装されたみどり食堂（旧理薬食堂）

で開催され、受賞者含め 48 名の参加がありました。奥村会員に乾杯のご発声をいただき、料理や宮城の地酒を片手に、受賞者のスピーチも交えながら、親睦を深めることができました。日本酒は一升瓶 4 本を持ち込ませていただいたのですが、すべて空になりました。台風の影響による参加者数の変更に対しては、東北大学生協同組合にいろいろとご配慮いただきました。

9 月 1 日午前の公開シンポジウム「東北の自然災害と第四紀学：最近の研究成果とこれから」では、第四紀学やその近接分野の専門家 5 名に登壇いただき、東北地方で近年発生した各種の自然災害に関連する研究成果を紹介いただきました。災害が多発する日本において、第四紀学やその研究者が果たす役割が大きいことを改めて感じることができたと思います。

9 月 2 日に栗駒山やその周辺で実施された専門巡検には 7 名が参加しました。仙台市内から貸切バスで巡検先に向かい、栗駒山の火山噴出物や 2008 年岩手・宮城内陸地震が地形や地質に残した痕跡を観察しました。道中、降雨もありましたが、夕方、無事に仙台駅で解散となりました。

2024 年大会においても昨年の大会同様、大会参加登録に Peatix を利用しました。受付での現金のやり取りがほぼなくなり、受付作業やキャンセル対応も円滑に進めることができました。最後になりますが、大会にご参加、ご協力いただいたすべての方に改めてお礼申し上げます。



写真 1：口頭発表会場での議論の様子

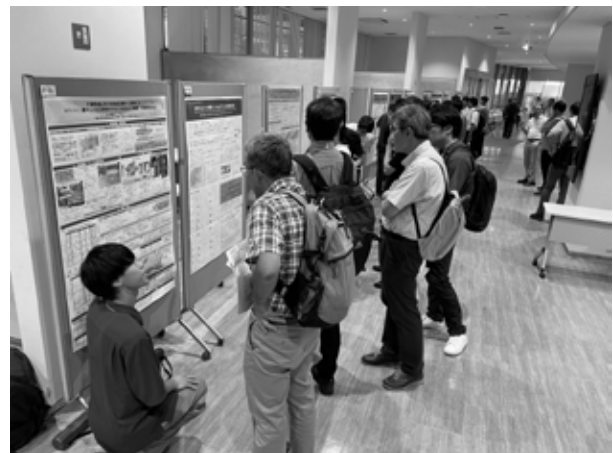


写真 2：ポスター発表会場風景

## ◆ 2024年大会若手・学生発表賞受賞者

2024年大会（東北大学）において若手・学生発表賞にエントリーされた発表の中から、若手・学生発表賞選考委員会（水野清秀委員長、浅海竜司委員、白井正明委員、高原 光委員、小荒井 衛委員）による選考結果と後日開催された執行部会での承認により、下記の方々の受賞が決まりました。

## ■ 若手口頭発表賞 1名（選考対象 6件）

受賞者：南館健太会員

タイトル：小笠原諸島のシンクホール堆積物が示す数百年スケールの熱帯低気圧活動の変更

発表者：南館健太（東京大学）・後藤和久（東京大学）・井村春生（東京大学）・笠井克己（東京大学）・石澤堯史（東北大学）・横山祐典（東京大学）

## ■ 学生口頭発表賞 1名（選考対象 5件）

受賞者：吉池奏乃会員

タイトル：海岸平野における津波侵食地形の調査とその形成に係る水理量の評価

発表者：吉池奏乃（東北大学）・菅原大助（東北大学）・石澤堯史（東北大学）・増田英敏（東北大学）・エリック ベラスコレイエス（東北大学）・南館健太（東京大学）

## ■ 若手ポスター発表賞 1名（選考対象 4件）

受賞者：林 尚輝会員

タイトル：植物珪酸体分析による種子島の約10万年前以降の植生変遷の復元

発表者：林 尚輝（大阪公立大学）・井上 淳（大阪公立大学）

## ■ 学生ポスター発表賞 1名（選考対象 7件）

受賞者：山根悠輝会員

タイトル：ストリームパワーモデルに基づく活断層の活動度推定：坪沼断層の例

発表者：山根悠輝（東北大学）・高橋直也（東北大学）

## ◆ 日本第四紀学会 2024年大会専門巡検報告（栗駒山の火山活動と岩手・宮城内陸地震）

白銀美里（岡山大学大学院教育学研究科教育科学専攻）

日本第四紀学会 2024年大会の専門巡検は、「栗駒山の火山活動と岩手・宮城内陸地震」をテーマとして、東北大学の遠田晋次氏と高橋尚志氏の案内で実施された。参加者の定員は22名とされ、台風10号の影響が心配されたが、案内者や補助係の学生含め11名が参加した。9月2日8時00分に仙台地下鉄国際センター駅北口にて集合し、貸切バスに乗って栗駒山の須川温泉で下車、そこから徒歩で登山口へ向かった。

午前の巡検では、栗駒火山北麓の火山噴出物や岩屑なだれ堆積物などを見学した。

最初に栗駒山の登山道入口において剣岳由来の岩屑なだれを観察した。ここは須川温泉として平



地獄釜火口を観察する参加者ら（報告者撮影）

安時代から親しまれ、峠を通過して人々が集ったという。硫黄特有のかおりが広がる中、そのまま展望台まで進み、南西方向に明瞭な柱状節理とふたつの滑落崖を確認した。高橋氏から、1744年もしくは1944年にゼッタ沢に沿って火山泥流（ラハール）が流れ下った可能性があるとの説明があった。しかし、「過去に発生した現象は本当にラハールであったか」という旨の指摘があり、活発な議論が行われた。改めて、当時の文書記録や堆積物の証拠を確認する必要があるというところで議論を終え、次に滑落崖の崖錐まで移動した。そこは剣岳の火山体であり、ふたつの滑落崖の境界をなしている。辺り一面には1～2cmほどの硫化した白っぽい礫が広がっている。これらは熱水で変質した可能性があり、硫黄の脈もみられた。そのままもう少し歩いて水蒸気噴火の火口である「地獄釜」を観察した。明治期に硫黄脈から採掘が行われており、現在も木造レールが残っている。そのレールの上には厚さ50cm以上の崖錐堆積物が載っていた。西暦915年に噴火したとされる十和田aの火山灰層を観察後、登山口に戻り昼食を食べた。

午後の巡検では、2008年岩手・宮城内陸地震が地形・地質に残した痕跡を辿った。バス内で説明が行われ、巡検では当時の写真と現在の状況を見比べながら巡った。最初に向かったのは一関市祭時地区で、地すべりによって崩壊した祭時大橋などの災害遺構と河成段丘を観察した。祭時大橋崩壊地点は、ふたつの河道に挟まれたやせ尾根となっ

ていたこと、地層が河道に傾斜する流れ盤であったことから、地すべりを発生させやすい地形地質状況であったと遠田氏から説明された。次の市野々原地区では、土砂地すべり河道閉塞跡を観察した。この地震での大規模斜面崩壊は、その多くが緻密で硬い地層が密度の低い地層に載る「キャップロック構造」を呈する斜面で発生しているとのこと。ただ、市野々原地区では、すべり面は新第三系の堆積岩中にあり、崩落土砂がほぼ原型をとどめた形で河道を閉塞したと説明された。最後に地表地震断層地形を巡った。岡山地区では、地震時にアスファルト舗装道路に約10cmの東西水平短縮および約20cm西側が隆起する上下変位があったとのこと。しかしその場所はすでに補修されていたためその段差は観察できなかった。柵木立地区での地表変状は、北東―南西方向に長さ約2kmにおよぶ。巡検では、地震以前から存在する断層変位地形とみられる台地状の高まりや、河川の中に生じた地震断層崖がその後16年間にわたる侵食で変化している状況などを観察した。

台風の心配がされていたが、当日は、巡検に差し支えない程度の降雨であった。

現地での遠田晋次氏と高橋尚志氏による詳細な解説と案内によって、栗駒山の火山活動と岩手・宮城内陸地震の痕跡を肌で感じる事ができた。案内者の遠田氏と高橋氏、東北大学の学生の皆様に深く御礼を申し上げたい。



剣岳で専門巡検参加者の集合写真（撮影：諏訪貴一）

## ◆アウトリーチ巡検「仙台市内の地形散策」に参加して

太田 麗（岡山大学教育学部 4 年生）・杉山 怜郎（同志社大学理工学部 3 年生）

2024 年仙台大会では、「仙台市内の地形散策」というテーマで、8 月 29 日にアウトリーチ巡検が行われた。案内者は、東北学院大学地域総合学部の目代邦康准教授、伊藤晶文教授である。非会員優先ということで募集していたためか、参加者は少なく、杉山と太田の 2 名であった。東北学院大の院生が案内者のサポートのため同行し、また巡検の最初の頃は堀実行委員長が参加していたため、最大 6 名での巡検となった。

今回の巡検のコースは、次の通りである。

地下鉄東西線国際センター駅（集合）→千貫沢遊歩道（上町段丘の段丘礫層、台地上の谷）→大橋（下町段丘 [完新世段丘]）→評定河原橋（広瀬川凝灰岩部層）→藤坂神社（かつての湧水地）→片平丁の街並み→荒町（大年寺山断層、長町一利府構造線）→東北学院大学五橋キャンパス（コースの振り返り）→地下鉄南北線五橋駅解散

はじめに、集合場所の地下鉄東西線の国際センター駅から仙台の街の中心部を眺め、広瀬川がつくる段丘地形の概要を理解した。そこから徒歩で駅西側の千貫沢に移動した。ここは、東北大学川内キャンパス内の小さな谷である。この開析谷は仙台下町面群の完新世 I 面を刻むものである。遊歩道途中の露頭（写真 1）で、泥の基盤岩の上に厚さ 3～4 m の礫層を観察した（写真 2）。遊歩道

の終点には、石垣（千貫橋水落石垣）があり、そこは、仙台城二の丸造営時のもので江戸時代に建築されたものであった。遊歩道から、段丘面の上にて、千貫沢の谷頭部に向かっていくと、徐々に谷は浅くなり、川内キャンパス内で消失していった。ここで堀実行委員長は離脱となった。

川内キャンパスから国際センター駅に戻り、そこから東側へ向かって広瀬川にかかる大橋を渡った。この大橋は、青葉城から城下町の中心地である芭蕉の辻を結ぶ道路のための橋であり、かつては主要な道路であった。そして、戦後、仙台の街の再開発により、この通りから、新たに作られた幅の広い道に、メインルートが変わっていったという街の変化について、大町西公園の付近で説明があった。

西公園通りから段丘崖を下り、かつては湧水があった藤坂神社（写真 3）に向かった。この神社は中町段丘と下町段丘の境界となる場所に位置している。現在は湧水は見られないが、かつては基盤岩の上の礫層から染み出る湧水があったそうで、それは藤清水と呼ばれていた。生活用水などにも利用されていたそうである。そして、藩政時代に中町段丘面上で利用されていた四ツ谷用水の第二支流が通っていた場所でもある。かつて、四ツ谷用水が街の暮らしを支えていたこと、またその用水の水は地下水の涵養もしていたことが説明された。



写真 1 東北大学川内キャンパス内の開析谷の露頭の観察の様子



写真 2 基盤と段丘礫層の露頭



写真3 藤坂神社

藤坂神社から評定河原に向かって南下し、広瀬川の河岸に露出している広瀬川凝灰岩部層を遠くから観察した(写真4)。この地層は約350万年前の噴火による火砕流堆積物である。比較的軟らかい岩盤であり、風化しやすく、崩れても礫として残りにくい。そうした環境のため、広瀬川の川底には比較的平滑な岩盤が広がり、礫が少ない河川地形になっているという説明があった。



写真4 広瀬川の河岸の地形とその観察の様子

その後、霊屋橋を渡って東方向に歩き、瀬一淵といった河床の地形や、川底に残された珪化木を観察した(写真5)。この珪化木は、広瀬川凝灰岩部層の地層中でみられるもので、当時、ここで大規模な火山活動にともなう大規模な堆積があったことと、その後の侵食の状況がわかるものであった。

東北大学片平キャンパスの西側の道を通り、東北学院大学土樋キャンパスへ向かった。そこで、更新世に形成された形成年代の異なる段丘面の高さの違いを感じることができた。土樋キャンパス内の建物の一部では、段丘面の高さの違いが、階段などの構造物から認識することができた。

最後に、荒町商店街から南鍛冶町に向かっての通りを歩きながら、大年寺山断層と長町一利府線による断層地形を観察した。そして、東北学院大学五橋キャンパスで、振り返りを行い、改めて広瀬川周辺の地形の発達について考えたり、参加者の感想を共有した。

現地では、案内者に詳しく案内をしていただき、仙台の地形に対して、広瀬川というものがいかに大きな影響を与えてきたのか、そしてそれを人々がどのように利用してきたのかを考えることができた。大変、学ぶことの多い巡検であった。この巡検に参加したことで、普段、何気なく通るちょっとした坂や階段が、実はその場所の地形の特徴を現しているものであるかもしれないと思うようになり、そのような場所を自分で発見してみたいと感じた。案内していただいた先生方に深く御礼を申し上げたい。



写真5 広瀬川の川底の珪化木

## ◆日本第四紀学会 2025年大会案内（第1報）

日本第四紀学会 2025年大会は以下の日程で開催予定です。ただし、今後の社会状況によっては、一部変更・中止になることがあります。

日程：2025年8月29日（金）～9月1日（月）

8月29日（金） 一般研究発表（口頭及びポスター）

8月30日（土） 一般研究発表（口頭及びポスター）、総会（ハイブリッド形式）、懇親会

8月31日（日） シンポジウム／普及講演会（公開／ハイブリッド形式）

9月1日（月） 専門巡検

会場：島根大学松江キャンパス（島根県松江市西川津町 1060）

開催方法：完全対面方式（一部ハイブリッド形式）を基本とします。

大会実行委員長：齋藤文紀（島根大）

実行委員：瀬戸浩二、香月興太、入月俊明、酒井哲弥、渡邊正巳（島根大）、中村唯史（三瓶自然館）、池原 実（高知大・行事委員長）ほか

## ◆日本地球惑星科学連合 2025年大会 (JpGU2025) のお知らせ（第1報）

2025年5/25（日）～5/30（金）の6日間の日程で、日本地球惑星科学連合 2025年大会（JpGU2025）が、現地（幕張メッセ）とオンラインをミックスしたハイブリッド形式にて開催されます。JpGU2025でも例年通り、宇宙惑星科学、大気水圏科学、地球人間圏科学、固体地球科学、地球生命科学、教育・アウトリーチ、複数領域の7つの一般カテゴリーに加えて、一般市民参加者向けのパブリックセッション、全分野に関する話題を取り上げるユニオンセッションなどが企画される予定です。一方で、この数年実施されていた口頭セッション内でのポスター発表フラッシュトークは行いません。

日本第四紀学会ではこれまでと同様に、「第四紀：ヒト－環境系の時系列ダイナミクス」を単独で、「活断層と古地震」を他学会と共同で主催してセッション提案を行います。ほかにも第四紀に関連するセッションが多数提案される見込みです。会員の皆様の参加をお待ちしています。

大会に関する詳細は [https://www.jpгу.org/meeting\\_j2025/](https://www.jpгу.org/meeting_j2025/) をご覧ください。

### 【大会の概要】

開催日時：2025年5月25日（日）～30日（金）

開催形式：ハイブリッド（現地＋オンライン）

現地会場：千葉県千葉市幕張メッセ

#### ●口頭発表

口頭セッションにて現地で、あるいはオンラインから Zoom 経由で、ライブ発表（ハイブリッド）

#### ●ポスター発表

オンライン掲示が必須、現地での発表は任意

オンラインポスターセッション（注 コアタイムに相当）、フラッシュトークは実施せず

### 【主な日程】

セッション提案：2024年10月1日（火）～10月29日（火）

開催セッション公開：2024年12月6日（金）

コマ割公開：2024年12月18日（水）

投稿受付：2025年1月16日（木）～2月18日（火） ※早期締切 2/6（木）23:59

## ◆学会賞等受賞者の言葉

### ●学会賞 受賞者の言葉 高原 光（京都府立大学名誉教授）

受賞件名：花粉分析に基づく第四紀の森林生態学と植生史研究への貢献（Contributions to Quaternary forest ecology and vegetation history research through palynological approaches）

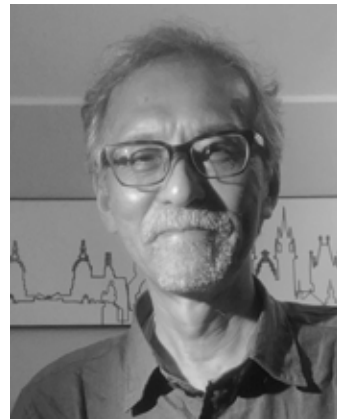
この度は、栄誉ある日本第四紀学会学会賞を授与していただきましたこと、心から御礼申し上げます。推薦者ならびに選考委員の皆様、そして、様々な手続きを進めて下さいました学会の役員、会員の皆様に感謝いたします。

これまで50年近く、森林生態学を基礎とした古生態学的な研究を続けてきました。京都府立大学の卒業論文の研究として、兵庫県の氷ノ山古生沼湿原の花粉分析学的研究を始めた時以来、スギ林の変遷についての一貫した課題を持っていました。

日本の植生帯について、暖温帯ではカシ類やシイ類の優占する照葉樹林、冷温帯ではブナの優占する落葉広葉樹林が認められています。ところが、暖温帯から冷温帯に広く分布するスギについては、その位置づけが明確ではありませんでした。これを解明していく過程で、次のような関連する課題を、様々な分野の研究者との交流、共同研究などを通じて得ることができました。1. 生態学的観点から、定量的な植生復元と植物群の時間的・空間的分布変遷の解明、2. 氷期・間氷期変動、特に最終氷期最盛期における植物群の分布解明、3. 日本列島の植生帯や成立過程を、東アジアにおける自然史の中に位置づける必要性。これらについて、近年次のような研究を進めてきました。

2014年に学術賞を受賞して以降、花粉分析のデータに基づく定量的な植生復元のため欠くことのできない課題として、特にデータの少ないトウヒ属、ツガ属などのマツ科針葉樹の花粉生産量解明のため、北海道から西日本までの各地に調査地を設定して研究を進めています。樹木の花粉生産は年変動が大きいため、研究に時間がかかりますが、順次公表していく予定です。

大学を2020年春に定年退職してからは、卒論以来の課題であるスギ林の変遷について共同研究者と総説をまとめることができ、最終間氷期以降



だけを見ても、スギが北海道を除く日本列島で優勢な期間が長く、植生帯で重要な位置を占めていることを示しました。また、多くの共同研究者と進めてきました最終氷期最盛期については、各地域の古植生について論文として公表しながら、それらを元に東アジアを含めた古植生をまとめたいと考えています。近年では、さらに、走査電子顕微鏡を用いた花粉分析により、種レベルでの植生変遷の解明に取り組んでいます。

前述のように様々な分野の研究者との交流から私の研究は進展してきました。学際的な日本第四紀学会はまさに、そのような交流を進める場でもあります。また、学会の執行部会、評議員会など学会の運営のために、年に何度も会議で集まったことは、オンライン会議では得にくい情報交換の機会でもありました。研究を進めるに際して、国内外の多くの研究者、京都府立大学の研究室と一緒に研究を進めてきた学生や研究者の皆さんには、多大なご協力をいただきました。今回の受賞に際して、研究を支えていただいたすべての皆様に感謝申し上げます。第四紀学の発展にさらに貢献できるよう、今後も研究を進めていきたいと思っています。



## ●学術賞 受賞者の言葉 加 三千宣 (愛媛大学沿岸環境科学研究センター)

受賞件名：別府湾ほかの沿岸堆積物を用いた後期完新世の環境変遷復元に関する一連の研究 (Studies on reconstruction of Late Holocene environmental changes using coastal sediments in Beppu Bay and other coastal waters)

このような榮譽ある賞を頂き、大変有難うございます。

この仕事を通じて、第四紀学が本当に素晴らしい学問体系だということに改めて気付かされました。第四紀学は、私たち人類が今この地球上でどんな時代を生きているのかを明確に教えてくれました。今私たちは第四紀の地球に住んでいますが、この時代は氷期と間氷期が4万年10万年の周期で繰り返し起こってきました。これが第四紀の地球の本来の姿です。258万年前に第四紀に入って北半球に氷床を伴う地球になりました。それは、ほぼCO<sub>2</sub>などの温室効果ガスが決定していて、CO<sub>2</sub>濃度が180ppmから300ppmの間でそれを超えない範囲で保たれてきました。これらの地球の自然の条件を第四紀学が教えてくれました。そして、第四紀学は、そうしたこれまで脈々と続いてきた自然の地球が、今は人によって変えられようとしていることも教えてくれました。氷期間氷期サイクルは、CO<sub>2</sub>濃度が高すぎて今後12万年間もこれまでの氷期に向かわない時代にすでに入りました。そのCO<sub>2</sub>濃度は、すでに第四紀の最高値を超えてしまって、今の排出削減目標を達成しても、産業革命以降から2-3℃全球気温が上昇し、海水準も2000年後には最小でも2-4m、最大6-10mまで上昇する。最大値は、グリーンランド氷床が全て解けることに起因するので、そうなった場合は北半球に氷床が有り続けた第四紀の地球ではなくなる。今は、その大変動のごく初期の兆候を見ているにすぎませんが、その閾値を超えるのは最短で6年後と迫っています。そう考えると、今や人類は、昔のか弱い人類ではない。地球システムを圧倒し、自然の状態を逸脱させてしまう力を持つ存在になったことになります。そうなったのは、ホモサピエンスが25万年前に誕生してから、最後のたった70年前のことです。そして、私たち人類の活動自体が地球を変容させ、それによって、私たち自身の繁栄を脅かすかもしれない。



「私たちは、まさに今、地球が完新世とは全く異なる地球に変容しようとしている人新世に生きている。」この洞察は、第四紀学というベースがあってこそ初めて見えてくるものだと思います。第四紀学の発展によって、今の私たちが生きている時代の本質を理解できるようになったといっても過言ではないと思います。その意味で、第四紀学という学問分野は、人類社会になくってはならない本当に素晴らしい学問である。人新世の仕事をしていて、そう強く思うようになりました。私がしたことは、別府湾堆積物中の人新世の始まりを明らかにしたことに過ぎませんが、そうした人類の知の財産である第四紀学に、少なからず貢献できたということが嬉しいですし、それが私の研究者人生で一番の財産になったと思います。この仕事に対して、このような賞を与えて頂き、本当に感謝しています。

最後に、この研究を一緒に支えて頂いた別府湾堆積物研究グループ、別府湾GSSP研究チームの方に心から感謝し、この受賞を分かち合いたいと思います。また、推薦頂いた横山祐典会員、審査員の方々、関わられた方々にも感謝の意を表し、私の言葉とさせて頂きたいと思います。有難うございました。

## ●学術賞 受賞者の言葉 田村 亨（産業技術総合研究所地質調査総合センター）

受賞件名：堆積相解析、地中レーダ探査、OSL年代測定を用いた沿岸域における地形・地層の形成過程解明に関する第四紀学への貢献 (Integrated analysis of coastal geomorphology and Quaternary stratigraphy with sedimentology, ground-penetrating radar, and optically stimulated dating)

この度は日本第四紀学会学術賞をいただくことになり、大変光栄に思っています。推薦者と審査委員の皆様へ深く感謝いたします。受賞件名に表されるように、私は海岸沿岸域の地層や地形の形成過程に興味を持ち、堆積相解析、地中レーダ (GPR) 探査、光ルミネッセンス (OSL) 年代測定を組み合わせて研究してきました。第四紀学の王道とはいえぬッチを埋めるようなものですので、今回その方向性を認めていただいたことが何よりの喜びです。

上記の組み合わせによる研究は他にもありますが、それを単独の研究者でカバーすることはほとんどありません。私が全てを経験できたのは、様々な方のご指導とご協力、偶然、そして恵まれた研究環境の賜物です。私は京都大学の増田富士雄先生のもとで堆積学の研究を始めましたが、当初目指した方向ではうまく行きませんでした。一方で先生の手伝いでやっていた九十九里平野と仙台平野の沖積層ボーリングの堆積相解析と<sup>14</sup>C年代測定による研究が面白くなり、結局それで学位をとらせていただきました。その関連でタイミング良く、産業技術総合研究所（産総研）の齋藤文紀さんのグループに2004年に職を得て、与えられたテーマが九十九里平野などのGPR探査でした。今でこそ多くの方が使っているGPRですが、その当時は沿岸域での使用のノウハウがあまりない上に、カートを押すやり方ではなくアンテナを手で持ち上げて移動させる時間と労力の必要なスタイルでした。なかなか芳しい結果が得られませんでした。試行錯誤の結果、表層が泥やアスファルトで覆われていない砂質の堆積物でGPRの性能を発揮できることが分かりました。そしてそれなら砂がふんだんにある場所ということで、鳥取砂丘を研究することになりました。

鳥取砂丘の研究を始めた2008年ごろ、OSL年代測定の信頼性が高まり普及したことで、GPRで得られた浜堤や砂丘の地質断面に年代を入れて空間・時間的に高分解能で地形の変遷・形成プロセスを明らかにする研究がスタートしました。私はどうしても、OSL年代を自分の意のままに使いたくなりました。しかし、国内には測定装置の数が少なく、とても意のままにという状況ではありませんでした。そこで思い切って日本学術振興会の海外



特別研究員の制度を利用して、在外研究でこの技術を身につけることにしました。2年という長期でしたが、早く送り出してくれた産総研に感謝しなければいけません。私はほとんど知識がないところからスタートしたものの、ホストのイギリス・シェフィールド大学 Mark Bateman 先生から懇切丁寧な指導を受けたことでなんとか年代値を出せるようになり、鳥取砂丘やベトナム・メコンデルタの浜堤を対象に研究成果を残すことができました。さらに在外研究の間には東日本大震災が起きました。そして帰国後に始まった震災関連の大型研究の一部としてOSL年代測定室を整備することになりました。この実験室はその後何度か拡張を経て現在に至りますが、このような機会がなければ私個人の努力ではとても実現することがなかったはずで

す。OSL年代測定室の構築は大変でしたが、大きな転機となりました。それまで自分のテーマに取り組むことが大半だったのが、多方面からの引き合いをいただき、考古学や初めて行く国の海岸など様々な研究に関わることができました。実験室の運営を始めて今年で12年目になります。当初に思い描いたことの大半が実現し、産総研内に同業の仲間も増えてアシスタントや学生に恵まれました。この技術を継承しさらに発展させてくれる人材を育成すること、堆積物運搬過程や起源の推定といったOSL測定の新たな方向性を模索することが、次に見えている課題です。また、OSL年代に拘らず、第四紀学的視点から海面上昇・温暖化下での海岸沿岸域の保全に寄与する研究を行いたいとも思っています。今回の受賞は今後の研究活動に向けて大きな励みとなりました。本当にありがとうございました。

## ●若手学術賞 受賞者の言葉 中西 諒 (京都大学大学院理学研究科)

対象論文 1 : Nakanishi, R., Ashi, J., Miyairi, Y., and Yokoyama, Y. (2022) Holocene coastal evolution, past tsunamis, and extreme wave event reconstructions using sediment cores obtained from the central coast of Hidaka, Hokkaido, Japan. *Marine Geology*, 443, 106663, <https://doi.org/10.1016/j.margeo.2021.106663>.

対象論文 2 : Nakanishi, R. and Ashi, J. (2022) Sediment transport modeling based on geological data for Holocene coastal evolution: Wave source estimation of sandy layers on the coast of Hidaka, Hokkaido, Japan. *Journal of Geophysical Research: Earth Surface*, 127, e2022JF006721, <https://doi.org/10.1029/2022JF006721>.

対象論文 3 : Nakanishi, R., Ashi, J., Aizawa, M. and Naruse, H. (2023) Application of mineralogy and geochemistry to identify the landward extent of paleo-tsunami deposits not visible to the naked eye in the coastal wetland of Erimo, Hokkaido, Japan. *Sedimentary Geology*, 447, 106365, <https://doi.org/10.1016/j.sedgeo.2023.106365>.

この度、日本第四紀学会若手学術賞をいただくことができ、大変光栄です。推薦者の方々、審査員の皆様にお礼申し上げます。また、この論文にご協力いただいた横山祐典先生・宮入陽介先生をはじめ、共同研究者の皆様、そして日々ご指導いただいた先生方に、心より感謝申し上げます。

学部から博士課程まで一貫して北海道における津波堆積物研究を行ってまいりました。2011年の震災を機に、当時の指導教員である岡村 聡先生に卒論テーマとして津波堆積物研究を薦めていただいたことが、研究に熱中するきっかけとなりました。受賞論文は、東京大学在籍中の博士課程とポスドクでの研究の一部であり、指導教員の芦寿一郎先生のご指導のもと、論文化にたどり着くことができました。いずれも千島海溝の地震履歴や津波の規模解明を目指し、北海道太平洋沿岸の日高地域における野外調査と数値モデリングを組み合わせた研究です。

北海道太平洋沿岸では、17世紀に広範囲に津波堆積物が分布しており、それが一つの巨大地震によるものか、複数のイベントによって形成されたかが明らかでないため、千島海溝の地震規模に関する不確実性が大きいという課題があります。これを明らかにしたいという一心で、微化石を用いた古環境解析や数値シミュレーションに挑戦し、それぞれ国際誌に発表することができました。

もう一編の論文では、X線CT、XRF コアスキャナー、SEM-EPMAなどの分析機器を駆使し、目視できないわずかな津波痕跡を追跡しました。現



在の受け入れ先である京都大学の成瀬 元先生とともに、深層学習を用いた水理条件の復元を試み、新たな分野への戸口となる論文となりました。こうした古環境研究や数値モデリング、深層学習といった多様な手法の会得は、私にとって研究スタイルの礎となっています。

年代測定や諸機器分析では、共同研究者の方々に助けていただき、異なる視点からのアプローチを取り入れることで、研究成果の質を高めることができました。今回の受賞は、私一人の力だけでは成し得なかった成果であり、これまでの支えに対する感謝の気持ちを再確認する機会となりました。今後も、今回の受賞を機に、さらに第四紀学の発展に貢献できるよう精進してまいります。改めて、このような名誉ある賞をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

●論文賞・奨励賞 受賞者の言葉 吉田 一希（国土地理院地理地殻活動研究センター）

受賞論文：論説 吉田一希・稲澤保行（2022）1mDEMを用いた地形判読・解析に基づく屈斜路カルデラの湖成地形と火山性断層群の形成史．第四紀研究第61巻第1号，27-44頁．

この度は、栄誉ある「日本第四紀学会論文賞」と「日本第四紀学会奨励賞」を授与していただき、誠にありがとうございます。推薦および選考していただいた皆様に厚く御礼申し上げます。本論文は当初は短報での投稿でしたが、査読者の方々や編集委員の皆様による建設的なコメントによって論説としてまとめることができました。この場をお借りして御礼申し上げます。また、共著者の稲澤さんをはじめ、湖沼データの作成に協力いただいた青柳様、粗稿を読んでいただいた国土地理院の上司の皆様、航空レーザデータを取得・管理・提供していただいた関係者の皆様、そして恩師である宮田雄一郎先生に深く感謝いたします。

本論文では、屈斜路湖の湖沼データと、航空レーザ測量による1m解像度のデジタル標高モデル（LiDAR DEM）を用いて、屈斜路湖岸の湖成段丘面・湖棚面の高度分布を詳細に明らかにし、各地形面の高度分布からアトサヌプリ火山群の隆起運動と湖水面変動を考察しました。また、アトサヌプリ火山群の断層地形とグラーベンの存在を詳細に明らかにしました。さらに、アトサヌプリ火山群の火山地形との関係から湖成地形と断層地形の形成順序や年代を考察して、約2万年前から現在にかけての地形発達史を検討しました。

LiDAR DEMでの判読による新たな知見として、湖成段丘面の後面段丘崖（波食崖）が新期ア



トサヌプリ火山I（I期溶岩ドーム群）の火山地形を刻んでいることが認められました。これにより、各段丘面の離水年代は従来の推定よりも約1万年ほど新しいことがわかり、アトサヌプリ火山群の隆起や断層地形の形成もまた、従来よりも最近の活動によるものと推定できました。

屈斜路カルデラ内には本論文や先行研究で言及されていない複雑な地形が多く残されています。この賞を励みにして、これからもLiDAR DEMなどの地形データを用いた地形判読・地形解析や火山研究の分野での探求を続け、第四紀学の発展に貢献できるよう努力して参ります。引き続き、ご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## ●論文賞・奨励賞 受賞者の言葉 高橋尚志（東北大学災害科学研究所）

受賞論文：論説 高橋尚志・青木かおり・村田昌則・小林 淳・鈴木毅彦（2022）伊豆諸島北部、利島における更新世末期の流紋岩質テフラの層序. 第四紀研究第 61 巻第 3 号, 87–107 頁.

このたびは、栄誉ある日本第四紀学会論文賞ならびに奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。本論文の共著者である、鈴木毅彦先生、青木かおりさん、小林 淳さん、村田昌則さん、そして東京都立大学地形・地質学研究室のメンバーの皆様には、現地調査から室内分析、日頃の議論と原稿作成に至るまで、大変お世話になりました。また、本論文を担当してくださった編集委員会の荻谷愛彦委員長と松多信尚委員、査読者の皆様、ならびに推薦者と論文賞選考委員の皆様にも、この場をお借りして深く感謝を申し上げたいと思います。

この論文は、私が 2019 年から 2020 年まで特任研究員（ポスドク）として所属していた東京都立大学火山災害研究センターでの研究成果を取りまとめたものです。同センターは 2017 年度に発足し、東京都や首都圏に影響を与えうる火山災害の評価・低減を目的としたプロジェクト研究を進めてきました。2022 年度からは「島嶼火山・都市災害研究センター」へと名称が変更されましたが、火山災害研究センターで実施されていた研究は現在も引き継がれております。

東京都に含まれる伊豆諸島の火山噴火履歴を解明することは、火山災害研究センターの重要なミッションの 1 つでした。私は、新島・神津島などを給源とした更新世の流紋岩質テフラを追跡するために、利島での調査を行いました。その結果、新島や神津島などで既に報告されているテフラに加えて、新たに 1 層の流紋岩質テフラが見出されました。このテフラは新島や神津島では未発見で、かつ最終氷期極相期頃に降下したことがわかり、おそらく低海水準期に現在の島棚や海丘頂部などから噴出した可能性が指摘されました。海洋火山島における更新世以前の噴火履歴を復元する上では氷河性海水準変動は無視できません。この洞察は当たり前かもしれませんが、改めて他の地域・



海域の火山噴火史やテフラ研究を見直す上での波及効果も大いにあると考え、第四紀研究への投稿を決めました。その成果をこのように学会として高く評価してくださったことは、幸甚の至りであります。

この論文を脱稿して以降、福岡ノ場やフンガトンガなどの海底火山噴火による漂着軽石や津波のハザードが相次ぎ、海底火山の評価・監視・防災の必要性が社会的にも強く認識されるようになりました。私どもの論文が、それに微力ながらも貢献できたのならば大変幸いに思います。今後とも引き続き研究に邁進し、第四紀学の発展や地質ハザードの評価に貢献していきたい所存です。

なお、最後になりましたが、研究を進めるうえでは、『利島村史』の調査・編さんに関わり、また学部時代の研究室の先輩でもあった故池田明彦さんには、重要な文献資料や情報を提供いただきお世話になりました。池田さんの訃報を知ったのは、本論文がまだ印刷中の時期でした。残念ながら高覧には叶いませんでしたが、本論文を池田さんに捧げ、謹んで感謝を申し上げたいと思います。

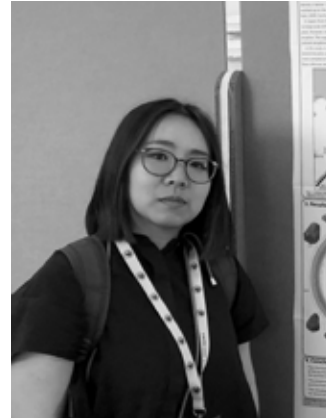
●奨励賞 受賞者の言葉 平峰玲緒奈 (国立歴史民俗博物館研究部)

受賞論文：短報 平峰玲緒奈・青木かおり・石村大輔 (2023) 青森県むつ市関根浜における完新世の漂着軽石とその給源火山. 第四紀研究第 62 巻第 2 号, 61–69 頁.

この度は、日本第四紀学会奨励賞を授与していただき、誠にありがとうございます。このような賞をいただきましたのは、本論文の共著者である北海学園大学の青木かおり准教授、東京都立大学の石村大輔助教、学部時代よりご指導いただいている鈴木毅彦教授、論文に有益なコメントをくださった査読者、また第四紀学会の編集委員・編集委員長・編集書記の方々など、周囲の皆様のおかげであると思っております。関わってくださった皆様に、この場をお借りして感謝申し上げたいと思います。

本論文は私の学位論文の一部で、青森県むつ市関根浜で露出する完新世の堆積物中にある 2 層の軽石濃集層に着目したものです。軽石に含まれる火山ガラスの屈折率や化学組成から、この 2 層の軽石濃集層はそれぞれ鬱陵島 U-2 テフラと十和田中楯テフラに由来することが明らかになりました。これらの軽石は、十和田中楯テフラの降下火山灰との層序関係や、それらの粒径・形状から漂着軽石であると考えられ、噴火からそれほど時間をおかずに、海から小河川を通じて潟湖などの湿地環境下に漂着し、堆積したものであると考えられました。このように、従来であればあまり注目されていなかった地層中に存在する漂着軽石の起源を明らかにすることで、古環境や噴火当時の海流を推定することにつながりました。

最近では 2021 年に発生した福徳岡ノ場噴火を



契機に、漂着軽石に関する研究が増えつつあるように思いますが、本論文のような事例を積み重ねることは、漂着軽石を用いた過去の海流や古環境復元、漂流・漂着軽石による間接的な火山災害を考える上で重要であると考えています。また今後もライフワークとして漂着軽石に関する研究を続けていき、漂流軽石の生産・運搬・堆積過程の一般化を目指していくつもりです。今現在も様々な起源の軽石が海岸に漂着しています。それらに記録されたことを一つ一つ紐解いていくことの面白さを、みなさんにもお伝えできればと思っています。

これからも第四紀学の発展に貢献できるように頑張りたいと思っておりますので、引き続きご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

◆ 2025 年日本第四紀学会学会賞・論文賞等の推薦のお願い

「日本第四紀学会会則」の第 3 条 (3) に基づき、2025 年日本第四紀学会学会賞 (以下、学会賞)、日本第四紀学会学術賞 (学術賞)、日本第四紀学会若手学術賞 (若手学術賞) 並びに日本第四紀学会論文賞 (論文賞)、日本第四紀学会奨励賞 (奨励賞) の受賞候補者の推薦募集を行います。前 3 賞は学会賞選考委員会が会員からの推薦をもとに受賞候補者を選考し、後 2 賞は論文賞選考委員会が会員からの推薦を参考に受賞候補者を選考します。最終的に 2025 年 6 月頃に開催される評議員会で受賞者が決定され、2025 年大会で表彰される予定です。会員のみならず多数のご推薦をお待ちしております。

なお、推薦にあたっては、学会 HP の「会則・規則」のページ (<http://quaternary.jp/intro/rules/rules.html>) に掲載されている「日本第四紀学会顕彰規程」及び関連する内規をご参照の上、下記に従って推薦

書類をお送り下さい。また、過去に受賞した会員は、論文賞を除き同じ賞を受賞することはできませんので、学会 HP の「歴史」のページ (<http://quaternary.jp/intro/history.html>) で歴代受賞者を事前にご確認頂きますようお願い致します。

## 1. 各賞の概要と推薦書類の記入内容

### ■学会賞・学術賞

学会賞と学術賞は、第四紀学の発展に寄与する研究や学会活動への貢献を行ってきた会員に贈られる賞です。

学会賞：第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動および学会活動に貢献した正会員に授与。学会における最高の賞。毎年若干名。

学術賞：第四紀学の発展に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与。優れた編書、著書、論文などの一連の業績が対象。対象成果が複数の著書（研究グループ等を含む）によりなされた場合には、筆頭著者または代表者に授与。毎年若干名。

下記の情報を記した推薦書類を作成して、主要業績リストと併せて日本第四紀学会事務局へ送付して下さい。

- (1) 推薦者の氏名・所属・連絡先（自薦を含む）
- (2) 賞の名称
- (3) 候補者の氏名・所属・連絡先
- (4) 学会賞の場合には、具体的な業績や活動内容を示した受賞件名  
学術賞の場合には、授賞の対象となる一連の業績を含めた受賞件名
- (5) 推薦理由（1,000 字以内）

### ■若手学術賞

若手学術賞は国際誌等における研究発表を通して第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた若手会員（2025 年 4 月 1 日時点で 39 歳以下の会員）に授与されるものです。受賞者数は若干名で、受賞対象は過去 2 年間の国際誌等に掲載された論文（オンライン化された論文を含む）の筆頭著者とします。受賞者には副賞として 5 万円の奨学金が授与されます。

下記の情報を記した推薦書類を作成し、推薦する論文の PDF とともに学会事務局へ送付して下さい。

- (1) 推薦者の氏名・所属・連絡先（自薦を含む）
- (2) 賞の名称
- (3) 候補者の氏名・所属・連絡先
- (4) 推薦論文題目、論文が掲載された雑誌名および出版年月・巻・号・頁、またはオンラインの公開日及び DOI
- (5) 推薦理由（800 字以内）

### ■論文賞・奨励賞

論文賞と奨励賞は、過去 2 年間に刊行された「第四紀研究」（第 62 巻第 1 号～第 63 巻第 4 号）に掲載された論文と著者が対象となります。ただし、編集委員会が非会員や学会賞・学術賞受賞者へ依頼した論文は対象外となります。

論文賞：会員である論文著者全員に授与。毎年 1～2 件程度。対象は掲載された全ての論文（短報を含む）。

奨励賞：会員である筆頭著者に授与。年齢は 2025 年 4 月 1 日時点で 35 歳以下。毎年 1～2 件程度。

受賞者には副賞として 5 万円の奨学金が授与されます。

推薦書類には下記の情報を記し、学会事務局へ送付して下さい。

- (1) 推薦者の氏名・所属・連絡先（自薦を含む）
- (2) 賞の名称
- (3) 論文賞の場合には、全著者名と推薦論文名
- (4) 奨励賞の場合には、候補者名と推薦論文名
- (5) 推薦理由（1,000 字以内）

## 2. 推薦書類の送付先

各賞の推薦書類は、郵送または電子メールで日本第四紀学会事務局へ送付して下さい。送付先の住所ならびに送信先のメールアドレスは下記のとおりです。

郵送：〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル

メールアドレス：daiyonki(at)shunkosha.com (“(at)”の部分を“@”に変えて下さい)

郵送の場合の宛名は、学会賞・学術賞・若手学術賞の推薦書類については、「日本第四紀学会 学会賞選考委員会」宛、論文賞・奨励賞の推薦書類については「日本第四紀学会 論文賞選考委員会」宛として下さい。電子メールの場合には、上記のそれぞれの宛先名を電子メールの件名に入力して送信して下さい。なお、PDF等のファイルを電子メールで送る場合、その容量が大きい場合(10MB以上)には、ファイル転送サービスを利用して下さい。

## 3. 提出期限

推薦書類の提出期限は、いずれも2025年2月28日(金)(必着)です。

## ◆日本第四紀学会 2024年度第1回執行部会議事録

日時：2024年7月27日(土)13:00～18:00

方法：Zoomシステムを用いたオンライン開催

出席者：鈴木毅彦(会長)、須貝俊彦(副会長)、北村晃寿(副会長)、山田和芳(庶務委員長)、堀和明(会計委員長)、苜谷愛彦(編集委員長)、那須浩郎(広報委員長)、池原実(行事委員長)、白井正明(渉外委員長)、吾妻崇(領域2代表)、里口保文(領域3代表)、小荒井衛(領域5代表)  
欠席者：横山祐典(領域1代表)、海部陽介(領域4代表)

### 主な報告事項

- (1) 転載許可申請2件、後援申請1件を承認した。
- (2) 「科学研究費助成事業の全体額増加に関する要望書」に学会として賛同を表明した。
- (3) 名誉会員候補者および2024年各賞受賞者へ受賞連絡を行った。
- (4) 第四紀研究第63巻第2号に掲載した論文の著者が希望した別刷・カラー代の請求書に誤りがあった。該当する会員には経緯を知らせるとともにお詫びした上で、改めて正しい請求書を発行した。
- (5) 2023年度収支会計報告が行われた。今後の会計監査、通信執行部会を開催しての承認プロセス、評議員会や総会への報告スケジュールについて確認した。
- (6) 学会のZoomアカウントの契約更新にあわせて契約内容を精査した。

(7) 第四紀研究第63巻第3号刊行に向けて、J-STAGEでの公開も含めて作業を進めた。

(8) 評議員会にて承認された電子付録の取扱変更についてホームページの該当部分を修正したのち、会員MLを通じて会員に周知した。

(9) 7月23日現在の通常号手持ち原稿状況は論説7編、短報2編、総説2編、資料2編となり、そのうち3編が受理済みと報告された。

(10) 学会ホームページリニューアル状況について説明があった。見積合わせによって業者を選定したこと、サイトオープンが2024年12月頃となること、2023年予算執行はなしとして、同額程度を2024年予算に組み入れることが報告された。また、ホームページカラーをロゴマーク規程カラーにあわせること、従前から準備していた日本の重要露頭紹介ページについての状況確認と今後の取扱いについて確認した。

(11) 第四紀通信第31巻第3号の編集を行った。

(12) 2024年8月29日～9月2日に開催する2024年仙台大会について、プログラム編成をはじめとした準備状況について報告があった。

(13) 2024年大会時の若手・学生発表賞の準備・選考プロセスについて確認した。

(14) 自然史学会連合総会、及び防災学術連携体総会に、担当会員が出席した。

(15) 防災学術連携体「令和6年能登半島地震・7ヶ月報告会(7月30日開催)」において、学会を代表して片岡香子会員が「令和6年能登半島地震に



よる新潟市の広域液状化被害」と題して発表する。

(16) 防災学術連携体から学会に要請があった幹事について、小荒井 衛会員を選出した。

(17) 日本地球惑星科学連合 (JpGU) 2025 年大会のスケジュール・会場が 2025 年 5 月 25 日～30 日、幕張メッセとなることが報告された。

(18) 「人新世の科学的根拠とその否認について」の解説文を 7 月 18 日にホームページに公表するとともに、プレスリリースを行った。

(19) 7 月 7 日に、領域 2 及び 5 の共同開催として「令和 6 年能登半島地震に関するシンポジウム」を開催した。基調講演 2 件と一般講演 6 件を行った。参加者は、現地参加 38 名、オンライン参加が 77 名であった。今後第四紀研究の特集号とする検討をはじめた。

(20) 70 周年記念事業の現状と今後の進め方について報告があった。先行して進めている朝倉書店から出版する出版本の編集状況についても報告があった。

(21) 2023 年度事業報告が行われた。軽微な文言チェックを行いながら次回評議員会、総会資料とすることとした。

### 主な審議事項

(1) 名誉会員、賛助会員のホームページ及び学会誌への表記方法を定めて、速やかに実施することとした。

(2) 学会誌および会報の海外発送に関する問題について、今後の進め方について議論した。今後、庶務委員会および事務局で行うことを確認した。

(3) 大会時における会員の書籍等販売について、会則及び大会運営規程と照らし合わせて方針を定めた。

(4) 2024 年度第 1 回評議員会にて承認された第四紀研究電子付録掲載要項の改正にあわせて、投稿規定の改正も必要であることを確認して、次回評議員会審議事項とすることが決まった。

(5) 前回選挙管理委員会の答申に基づいて、役員選挙規程改正に向けての議論を行った。会費未納者及び領域未指定者の扱い方、領域毎の評議員定数の格差、投票システム、低い投票率等の現状の課題や問題点を整理した。議論の結果、過去の状況をさらに分析する必要があるため継続審議として、次回執行部会にて基本方針を定めることとした。

(6) 顕彰関係受賞者の大会参加補助について議論を行った。これまで慣例として運用してきた経緯

や、近年の大会運営状況について該当者から報告があり、意見交換を行った。その結果、①新しく名誉会員になる会員にかかる懇親会費・旅費（交通費・1泊分の宿泊費）、②学会賞・学術賞・若手学術賞・論文賞（筆頭著者のみ）・奨励賞受賞者の懇親会費を学会負担とする内規を定めることとした。また、毎年度の予算支出科目「学会賞等顕彰費」を 20 万円分の増分とするとした。

(7) 庶務委員長の学会運営業務の軽減措置として、執行部会への庶務委員会委員を 1 名参加させることとした。規程内で実施できるものを確認した。

(8) 2024 年度事業計画案及び予算案について審議した。今後、軽微な文言チェックを行いながら通信執行部会承認を経たうえで、次回評議員会、総会資料とすることとした。

(9) 新規入会時の会費納入に、web 決済システムを導入する検討をはじめた。

(10) 事務機能の一部を業務委託している株式会社春恒社への業務委託費の支払いについて、第 1・2 回概算払額をこれまでより 20 万円減額することが承認された。また、契約内容の変更はないことも同時に確認された。

(11) 第四紀研究に掲載する論文の完全電子化や電子編集システムの導入について検討をはじめるとあたっての意見交換が行われた。今後、中長期的な学会収支の推移を注視しながら、会誌・会報発行形式を変更するなど大きな改革を伴うものであることが確認された。

(12) 2025 年大会について、島根大学松江キャンパスにて 2025 年 8 月 29 日 (金)～9 月 1 日 (月) の期間、齋藤文紀会員を大会実行委員長として実施すること、本内容を次回会報にて第 1 報として掲載することが承認された。

(13) 7 月 7 日開催した能登半島地震シンポジウムの講演内容を中心として特集号を企画予定であること、また 2024 年大会 (仙台) シンポジウムについても特集号を企画予定であることが報告され、執筆者の範囲や特集号企画申請に関する意見交換を行った。

### その他

(1) 2023 年度収支会計報告および会計監査結果、2024 年度事業計画案、予算案についての審議承認のための臨時執行部会開催プロセスについて確認が行われた。

以上

## ◆日本第四紀学会 2024 年度第 2 回執行部会議事録

日 時：2024 年 9 月 29 日（日）9:00～12:30  
方 法：Zoom システムを用いたオンライン開催  
出席者：鈴木毅彦（会長）、須貝俊彦（副会長）、  
北村晃寿（副会長）、山田和芳（庶務委員  
長）、池原 実（行事委員長）、吾妻 崇（領  
域 2 代表）、里口保文（領域 3 代表）、小  
荒井 衛（領域 5 代表）  
欠席者：堀 和明（会計委員長）、荻谷愛彦（編集  
委員長）、那須浩郎（広報委員長）、白井  
正明（渉外委員長）、横山祐典（領域 1 代  
表）、海部陽介（領域 4 代表）

### 主な報告事項

- (1) 正会員（終身会員）の申請状況と、承認プロセスについて確認した。
- (2) 2024 年（仙台）大会の開催報告が行われた。
- (3) 2024 年（仙台）大会の収支決算報告が承認された。
- (4) 日本地球惑星科学連合（JpGU）2025 大会の開催概要及び準備状況が報告された。
- (5) 防災学術連携体の幹事に小荒井 衛会員が就任した。2024 年総会が 7 月 30 日に開催され小荒井会員が出席した。同日開催された「令和 6 年能登半島地震・7 ヶ月報告会」では、片岡香子会員が「令和 6 年能登半島地震による新潟市の広域液状化被害」と題した講演を行った。8 月 22 日に開催した第 6 回防災に関する学術会議、学協会、府省庁の連絡会に鈴木会長、小荒井会員が出席し、穴倉正展会員が地形変化に関する報告を行った。
- (6) 領域 2 及び 5 で開催した能登半島地震に関するシンポジウム（2024 年 7 月 7 日開催）の講演内容を中心として第四紀研究特集号を企画していることが報告された。
- (7) 学会パンフレットの準備状況について報告があり、完成までのスケジュールについて確認した。
- (8) 学会設立 70 周年記念事業に関して出版する一般書籍本について、原稿提出状況および今後の進め方について確認した。

### 主な審議事項

- (1) 2024 年度学会賞選考委員・論文賞選考委員・選挙管理委員会候補者を決定し、10 月 26 日に第 3 回（臨時）評議員会を開催して承認いただくこととした。なお、未決の委員候補者については、

上記評議員会前までにメール等を用いて執行部会として決定することとした。

- (2) 役員選挙規程の改正についての検討を引き続き行った。評議員定数の変更については、影響を受ける領域を中心に事前に意見聴取を行うとともに、10 月 26 日開催の第 3 回（臨時）評議員会にて懇談事項とすることとした。一方、郵便投票の廃止、会費未納者・領域未指定者の取扱いについて議論を行い基本的な方針を定めた。次回執行部会にて、規程改正案、内規等を審議したのち、評議員定数の変更もあわせて、12 月開催予定の第 4 回評議員会にて審議、承認いただくこととした。
- (3) 賛助会員の学会誌掲載について、表記方法、掲載場所について賛助会員から希望を伺い、改めて編集委員会にて原案を作成し、執行部会にて審議することとした。

- (4) 新しい学会ホームページの基本レイアウト（色、構成）について、引き続き執行部会メンバーからコメントを収集することとし、執行部会内で異存がなければ引き続き準備作業を進めていただくこととした。

- (5) 2024 年（仙台）大会若手・学生発表賞選考委員会からの答申を受けて、受賞候補者として推薦された以下 4 名について審議した結果、各受賞を決定した。今後、対象者への連絡および学会ホームページ・会報への掲載を準備することとした。

若手口頭発表賞：O-11 南館健太会員

「小笠原諸島のシンクホール堆積物が示す数百年スケールの熱帯低気圧活動の変更」

学生口頭発表賞：O-13 吉池奏乃会員

「海岸平野における津波侵食地形の調査とその形成に係る水理量の評価」

若手ポスター発表賞：P-11 林 尚輝会員

「植物珪酸体分析による種子島の約 10 万年前以降の植生変遷の復元」

学生ポスター発表賞：P-03 山根悠輝会員

「ストリームパワーモデルに基づく活断層の活動度推定：坪沼断層の例」

- (6) 2024 年（仙台）大会の若手・学生発表賞選考における問題点を整理して、今後の選考方法について規程の改正を含めて検討していくこととした。
- (7) 2024 年（仙台）大会における運営体制や大会実行委員会や行事委員会等の役割分担についての状況を整理した 2025 年（島根）大会への引継文

書を確認した。大会サイトや参加費支払いをオンライン化したことによる課題、学会大会のハイブリッド形式について議論した。

(8) 2024年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞記念講演会について、2025年2月の土曜日（午前）を想定して受賞者と日程調整を行い、記念講演会（Zoomを用いてオンライン形式）の準備を行うこととした。また、同日、若手・学生発表賞の授賞式を検討することとした。

(9) JpGU2025大会における第四紀セッションを英語発表することについて、JpGU等の動向を共有しながら審議した。その結果、2025大会はこのまま日本語による発表形態にするものの、2026年大会からの英語発表化に向けての準備を開始する

こととした。

(10) 地学オリンピック予算参加者に配布する冊子に第四紀学会の紹介チラシを掲載することとした。

(11) 2026年に開催する学会設立70周年記念大会は、産業技術総合研究所（茨城県つくば市）を候補として進めることとした。

#### その他

(1) 評議員会、役員選挙等年度内のスケジュールについて確認した。

以上

## ◆日本第四紀学会 2024年度第1回通信執行部会議事録

開催期間：2024年8月19日（月）12:01～8月25日（日）23:59

下記の3件について、日本第四紀学会執行部会規程第10条（執行部会では、会長が必要と認める場合には、会合の開催のほか、電磁的な方法を用いて、審議を行うことができる。）に基づき、執行部会メーリングリストを用いた電磁的方法で審議した。

審議事項1. においては、明らかな間違いや項目を移動するなどの軽微な修正を加えた上で承認された。審議事項2. においては、表記の間違いを修正した上で承認された。審議事項3. においては問題なく承認された。

#### 審議事項

1. 2023年度事業報告、2024年度事業計画案について

2023年度事業報告、2024年度事業計画案をそれぞれ確定する。

2. 2023年度決算報告・監査報告、2024年度予算案について

2023年度決算および監査報告、2024年度予算案をそれぞれ確定する。

3. 2024年大会の発表賞選考委員会委員（若手、学生発表賞の審査委員）任命について

顕彰規程第8・13・17条に基づき、2024年大会（仙台）にて一般研究発表を行う対象となる会員の若手・学生発表賞の受賞者を選考するため、発表賞選考委員会を立ち上げ、各領域から推薦された下記会員を委員として任命する。

領域1 浅海竜司会員（東北大学）

領域2 白井正明会員（東京都立大学）

領域3 水野清秀会員（産業技術総合研究所）

領域4 高原 光会員（京都府立大学）

領域5 小荒井 衛会員（茨城大学）

以上

## ◆日本第四紀学会 2024 年度第 2 回評議員会議事録

日 時：2024 年 8 月 29 日（木）14:30～17:30  
場 所：東北大学青葉山北キャンパス地球科学系  
研究棟 2 階 201 室（地理講義室）

方 法：対面＋Zoom オンライン（ハイブリッド）  
出席者：鈴木毅彦（会長）、北村晃寿（副会長）、  
須貝俊彦（副会長）、＜以下、評議員＞水  
野清秀（議長）、池原 実、久保田好美、  
加 三千宣、吾妻 崇、奥村晃史、苅谷  
愛彦、久保純子、佐藤善輝、白井正明、  
堀 和明、青木かおり、納谷友規、齋藤  
めぐみ、中塚 武、小荒井 衛、前李英明、  
山田和芳

委任状：議長委任 15 通

オブザーバー出席：藤原 治（会計監査）、永峯菜  
穂子（事務局）

鈴木毅彦会長の挨拶後、定足数の確認を行った。  
以降は水野議長による議事が進められた。最後に  
須貝俊彦副会長の挨拶で閉会となった。

### 報告事項

#### (1) 2023 年度事業報告

担当の各委員長、領域代表またはその代理とし  
て庶務委員長から報告が行われた（総会議事録の  
資料 1 参照）。

#### (2) 2023 年度会計決算報告・会計監査報告

堀会計委員長から、2023 年度会計決算報告の説  
明が行われた（総会議事録の資料 2 参照）。また、  
2023-2024 年度会計監査の藤原会員から 2023 年  
度会計監査報告が行われた（総会議事録の資料 3  
参照）。

#### (3) 2024 年度 7-8 月期の領域活動報告

吾妻領域 2 代表から、2024 年 7 月 7 日に開催し  
た「令和 6 年能登半島地震に関するシンポジウム」  
の開催報告がなされた。また、加評議員（領域 1）  
から、海洋コア岩相記載武者修行イベントの第 2  
回を 2024 年 11 月 16 日～19 日に開催することが  
報告され、9 月初旬に広報を開始することとした。

#### (4) 2024 年大会の若手・学生発表賞

池原行事委員長から、2024 年大会時の若手・学  
生発表賞の選考スケジュールや選考委員について  
報告された。

#### (5) 学会ホームページのリニューアル時期変更

那須広報委員長の代理として山田庶務委員長  
から、学会ホームページリニューアルについて、

2023 年度末から 2024 年度中（2024 年 12 月）に  
時期が遅れることが報告された。

#### (6) 日本学術会議 INQUA 小委員会報告

鈴木会長から、2023 年度における活動内容や今  
後の委員会開催予定が報告された。

#### (7) 人新世作業部会の提案書に基づいた対応につ いて

山田庶務委員長から、2024 年度第 1 回評議員会  
にて承認された「人新世の正式提案書に関する情  
報公開について」のその後の執行部会の作業状況  
とともに、2024 年 7 月 18 日に学会ホームページ  
公開やプレスリリースしたことが報告された。

#### (8) その他

山田庶務委員長から、職務上奨励賞の副賞を辞  
退された会員がいること、今後の顕彰規程の見直  
しに反映することが報告された。

### 審議事項

#### (1) 2024 年度事業計画

各担当委員長、領域代表またはその代理として  
庶務委員長から説明があり、総会に諮ることで承  
認された（総会議事録の資料 7 参照）。

#### (2) 2024 年度予算案

堀会計委員長から、予算案が示され、特に別刷代・  
超過頁代收、会誌発行費、学会ホームページ改  
修費、学会賞等顕彰費などの説明があり、総会に  
諮ることで承認された（総会議事録の資料 8 参照）。

#### (3) 第四紀研究投稿規定の一部改正

苅谷編集委員長から 2024 年度第 1 回評議員会  
にて承認された「第四紀研究電子付録掲載要項」  
の改正にあわせた第四紀研究投稿規定の一部改正  
について説明が行われ、審議の上で下記（次ペー  
ジ）のとおり承認された。また、改正の日付を統  
一するため、第四紀研究電子付録掲載要項の改正日  
を 2024 年 8 月 29 日に修正することも承認された。

#### (4) 2025 年大会

2025 年大会を島根県松江市の島根大学で 2025  
年 8 月 29 日～9 月 1 日に開催することとし、大  
会実行委員長を齋藤文紀会員が務めることが承認  
された。

### 確認事項

総会資料、2024 年度役員・委員会委員の確認を行っ  
た。

第四紀研究投稿規定の改正部分（抜粋）

(旧)	(新)
<p>2-4. 電子付録： 著者の申し出があり、かつ別途定める第四紀研究電子付録掲載要項に基づいて編集委員会が適当と判断する場合、原稿の掲載にあわせて、原稿の内容の一部を第四紀研究電子付録として日本第四紀学会ホームページと J-STAGE Data に掲載することができる。</p>	<p>2-4. 電子付録： 著者の申し出があり、かつ別途定める第四紀研究電子付録掲載要項に基づいて編集委員会が適当と判断する場合、原稿の掲載にあわせて、原稿の内容の一部を第四紀研究電子付録として(削除) J-STAGE Data に掲載することができる。</p>

以上

◆日本第四紀学会 2024 年総会議事録

日時：2024 年 8 月 31 日（土）15:45 ～ 17:45（授賞式を含む）

場所：東北大学青葉山北キャンパスでの対面と Zoom システムを用いたオンラインによるハイブリッド会議

司会の池原 実行事委員長による開会の辞、鈴木毅彦会長、堀 和明大会実行委員長の挨拶が続き、定足数の確認（委任状を含め正会員数の 10 分の 1 以上の出席が必要）が行われ、総会成立条件を満たしていることが報告された（最終的な参加者数は、会場参加正会員 44 名、オンライン参加正会員 11 名、委任状 62 通：すべて議長委任）。議長に池原 研会員を選出し、下記の議事が進められた。総会に引き続いて、授賞式が行われた。

報告事項

(1) 2023 年度事業報告

資料 1 に基づき、山田庶務委員長から報告された。

(2) 2023 年度会計決算報告・会計監査報告

堀 和明会計委員長から資料 2 に基づき、会計決算報告が行われた。また、2023-2024 年度会計監査の藤原 治会員・植木岳雪会員から資料 3 に基づき会計監査報告が行われた（報告は藤原会員）。

(3) 2024 年学会賞・学術賞・若手学術賞選考報告

(4) 2024 年論文賞・奨励賞選考報告

(5) 2024 年功労賞選考報告

各選考報告資料は、「第四紀通信」第 31 巻第 3

号掲載と同じ内容であり、各賞の受賞者名が山田庶務委員長から報告された。

(6) 学会設立 70 周年記念事業委員会（特別委員会）の設置

山田庶務委員長から説明された。内規については「第四紀通信」第 31 巻第 2 号にて掲載している。

(7) 「第四紀研究」電子付録の取扱い

山田庶務委員長から説明された。規定改正の内容については「第四紀通信」第 31 巻第 3 号にて掲載している。

(8) 「人新世の科学的根拠とその否認について」の解説文の公開について

山田庶務委員長から説明された。内容については「第四紀通信」第 31 巻第 3 号にて掲載している。

(9) 日本学術会議 INQUA 小委員会報告

資料 4 に基づき、齋藤文紀委員長から、日本学術会議 INQUA 小委員会についての活動報告がなされた。また、年代層序単元としての人新世の正否について、これに関する国際地質科学連合 (IUGS)、第四紀層序小委員会 (SQS)、人新世作業部会 (AWG) の組織の動向について報告された。

(10) 2024 年度第 1・2 回評議員会、第 1 回執行部会、第 1 回通信執行部会審議事項報告

新しい会計年度に実施された評議員会および執行部会での審議事項が山田庶務委員長から報告された。

(11) その他

特になし。

**審議事項**

- (1) 2023 年度事業報告  
資料 1 の 2023 年度事業報告は承認された。
- (2) 2023 年度会計決算報告・会計監査報告  
資料 2、3 の 2023 年度会計決算報告・会計監査報告は承認された。
- (3) 会則の一部改正について  
資料 5 に基づき、1. 会合の形式の明文化に関する事項（第 3 章 第 8 条）、2. 会長、副会長の議決権に関する事項（第 4 章 第 14 条）、3. 正会員の会費に関する事項（第 2 章 第 7 条および付則）について一部文言修正の上ですべて承認された。  
資料 6 会則(2024 年 8 月 31 日、総会で一部改正)

- (4) 2024 年度事業計画  
資料 7 の 2024 年度事業計画は承認された。
- (5) 2024 年度予算案  
資料 8 の 2024 年度予算案は承認された。
- (6) 名誉会員の承認  
竹村恵二会員および辻 誠一郎会員を名誉会員とすることが承認された。選考過程や推薦資料は「第四紀通信」第 31 巻第 3 号にて掲載している。
- (7) その他  
特になし。  
資料 9 2023-2024 年度役員・委員会委員等一覧  
(下線部：更新部分)

以上

**資料 1 2023 年度事業報告(2023 年 7 月 1 日～2024 年 6 月 30 日；一部 2024 年 8 月中旬までの経過報告)**

**1-1 庶務委員会**

- (1) 2023-2024 年度の役員・委員会委員等を決定し、委嘱を行った。
- (2) 総会を 2023 年 9 月 2 日に大会会場の早稲田大学所沢キャンパスでの対面と Zoom システムを用いたオンラインによるハイブリッド会議として行った。
- (3) 評議員会（第 1 回<sup>1)</sup>:2023 年 7 月 2 日、第 2 回<sup>2)</sup>:2023 年 8 月 31 日、第 3 回<sup>1)</sup>:2024 年 3 月 21 日、通信第 1 回:2023 年 8 月 11 日～18 日）を開催した。
- (4) 執行部会（第 1 回<sup>1)</sup>:2023 年 7 月 31 日、第 2 回<sup>2)</sup>:2023 年 9 月 2 日、第 3 回<sup>1)</sup>:2023 年 10 月 14 日、第 4 回<sup>1)</sup>:2023 年 12 月 15 日、第 5 回<sup>1)</sup>:2024 年 1 月 21 日、第 6 回<sup>1)</sup>:2024 年 2 月 3 日、第 7 回<sup>3)</sup>:2024 年 5 月 30 日、通信第 1 回:2023 年 8 月 11 日～18 日、通信第 2 回:2024 年 1 月 14 日～21 日、通信第 3 回:2024 年 3 月 9 日～15 日）を開催した。  
(<sup>1)</sup> オンライン、<sup>2)</sup> ハイブリッド（対面+オンライン）、<sup>3)</sup> 対面)
- (5) 入退会の申し出への対応を行い、会員名簿の管理を行った。  
2024 年 6 月 30 日時点での会員数は以下の通りである。  
正会員 872 名（うち学生会費適用者 14 名）、賛助会員 9 社、名誉会員 17 名。  
逝去：鎮西清高名誉会員(元会長:1995～1996 年度)、太田陽子名誉会員(元副会長:1997～1998 年度)、石井久夫正会員。
- (6) 2024 年学会賞・学術賞・若手学術賞・論文賞・奨励賞の受賞候補者の推薦募集（締め切り：2024 年 2 月 29 日）を「第四紀通信」・HP 及び会員 ML を通じて行った。また、学会賞選考委員会および論文賞選考委員会を立ち上げ、選考作業の依頼を行った。
- (7) 転載許可申請に関する業務を行った（15 件承認）。
- (8) シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行った（共催：第 33 回社会地質学シンポジウム、後援：第 66 回粘土科学討論会）。
- (9) 学術機関等への支援を行った（サポートレター送付：名古屋大学宇宙地球環境研究所、東北大学災害科学国際研究所）。
- (10) オンライン委員会（特別委員会）継続、学会設立 70 周年記念事業委員会（特別委員会）設置に関する業務を行った。
- (11) 顕彰規程等に関する検討委員会の答申（2022 年 8 月）をうけて、顕彰規程および論文賞・奨励賞選考に関する内規改正を行った。また、それ以外の顕彰規程等の見直しを継続的に進めた。
- (12) 日本第四紀学会ロゴマーク使用規程を設置した。
- (13) 英語名称のなかった受賞名を以下の通りの英語名称に決定した。

日本第四紀学会論文賞 JAQUA Outstanding Paper Award

日本第四紀学会功労賞 JAQUA Distinguished Service Award

日本第四紀学会若手発表賞 JAQUA Outstanding Early Career Researcher Presentation Award

日本第四紀学会学生発表賞 JAQUA Outstanding Student Presentation Award

(14) これまでの学会賞・学術賞のタイトルの英語名称を受賞者等と調整して、決定した。

(15) 2024年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」に対して、会長談話を2024年1月21日にホームページ等で発信した。

(16) 名誉会員候補者選考委員会を立ち上げ、名誉会員候補者と功労賞候補者の選考を行った。

## 1-2 会計委員会

(1) 会費のオンライン決済システムをはじめた。

(2) 2023年所沢大会の決済処理、第1回事務局委託経費等の支払処理、INQUA若手派遣支援、各領域活動に関する支払処理等を行った。

(3) 2023年度会計報告を取りまとめた。

(4) 領域活動に関する支払いルールについて検討した。

(5) 学会のZoom契約について見直しを進めた。

(6) 会員数維持のための会費見直しについて、他学会の状況を整理分析して基礎資料を作成した。

## 1-3 編集委員会

(1) 「第四紀研究」通常号及び2021年福岡シンポジウム特集号(奥野 充委員長)の編集を進めた。また「令和6年能登半島地震」に関する速報的論文(口絵および資料)の審査を進めて、順次受理した。いずれも第63巻第2号にまとめた(ただし能登半島関連の1編は第63巻第3号掲載)。

(2) 2023年3月5日に開催した領域4主催シンポジウムのプロシーディングとして、特集号「縄文時代早期人とその生態—群馬県居家以岩陰遺跡を中心に—(特集号委員長 工藤雄一郎会員)」の編集を開始した。

(3) 特集号として掲載予定の受理済み論文および能登半島関連の速報的論文についてJ-STAGEの早期公開論文認証(エンバーゴ)を解除してフリーで閲覧できるようにした。

(4) 編集委員会(通常号)をオンライン及びメール審議形式で15回開催した。2024年7月23日現在の通常号手持ち原稿(書評を除く)は受理前15編、受理済3編。

(5) 「第四紀研究」第63巻第1号より表紙・背表紙の帯色を変更した。

(6) 「令和6年能登半島地震」に関する緊急性・速報性の高い研究成果を「第四紀研究」に速やかに掲載する体制を整え、会員向けの投稿依頼文を作成・周知した。

(7) 投稿規定の一部を改正し、2024年度以降の「第四紀研究」電子付録はJ-STAGE Dataのみで公開することとした。

## 1-4 広報委員会

(1) 「第四紀通信」の編集および学会ホームページ、メーリングリストの維持管理を行った。

(2) 「第四紀通信」第30巻第3、4号、第31巻第1、2号を編集し、発行した。

(3) 「第四紀通信」各号の電子版(PDF版)を、それぞれ発行前月の下旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。

(4) 日本第四紀学会ホームページを通じて広報、情報提供等を行った。

(5) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて広報、情報提供等を行った。2023年度の配信件数は132件(#1614~1745)であった。

(6) 日本第四紀学会ホームページのリニューアルに向け、ホームページの内容整理および制作委託業者の選定を行い、リニューアル作業を進めた。なお、ホームページリニューアル作業は予定よりも時間がかかり、本年度中のリニューアルはできなかったため、次年度に完成させることとした。

## 1-5 行事委員会

(1) 日本第四紀学会 2023 年大会を 2023 年 8 月 31 日(金)～9 月 4 日(月)に早稲田大学所沢キャンパス(埼玉県所沢市)において対面方式で開催した(大会実行委員長:山田和芳会員、実行委員:久保純子会員、内記昭彦会員、植木岳雪会員、小森次郎会員、納谷友規会員、目代邦康会員、谷川晃一朗会員、工藤雄一郎前行事委員長)。9 月 4 日実施予定であった専門巡検は悪天候のため中止したが、それ以外は予定通り実施できた。参加者は会員・非会員あわせて 121 名であった。9 月 1 日、2 日の一般研究発表は、口頭発表 29 件、ポスター発表 15 件であった。また、2 日午後には総会と授賞式が対面とオンラインのハイブリッド方式で行われた。9 月 3 日午前中にはシンポジウム「都市環境～ウェルビーイングな社会創出のための第四紀研究」が開催され、5 件の講演があった。同日午後には普及講演会「武蔵野台地をとりまく関東平野の『でござこ』風景を読む」が開催され、鈴木毅彦会長による一般向け講演があった。8 月 31 日にはプレ巡検「狭山丘陵南部、玉川上水を巡る」、9 月 3 日午後にはアウトリーチ巡検「里山の風景を知り学ぶ、楽しい里山歩き会」が行われた。

(2) 2023 年大会若手・学生発表賞受賞者の選考について選考委員会を立ち上げて行った。中西 諒会員(口頭若手)、レゲット 佳会員(口頭学生)、安東 梢会員(ポスター学生)がそれぞれ受賞した。

(3) 2023 年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞記念講演会の関係者調整およびポスター製作および告知を行った。

(4) 2023 年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞記念講演会を 2024 年 2 月 17 日(土) 9:30～12:30 にオンラインで開催した。事前申込者は約 110 名であり、当日の参加者は約 70 名だった。講演は、学会賞受賞者の兵頭政幸会員による「数十～数百年スケールの地磁気逆転・気候層序」、学術賞受賞者の池原 実会員による「南大洋の古海洋変動研究の成果と展望」、学術賞受賞者の堀 和明会員による「完新世における沖積平野の地形発達と堆積システムの変化」であった。

(5) 2024 年大会を 2024 年 8 月 29 日(木)～9 月 2 日(月)に東北大学青葉山キャンパスを会場として開催する予定で準備を進めている(大会実行委員長:堀 和明会員、実行委員:目代邦康会員、西城 潔会員、池原 実行委員長、ほか)。アウトリーチ巡検は 8 月 29 日、一般研究発表は 8 月 30 日・31 日、総会は 8 月 31 日、シンポジウム(東北の自然災害と第四紀学:最近の研究成果とこれから)は 9 月 1 日に公開/ハイブリッド形式にて、専門巡検「栗駒山の火山活動と岩手・宮城内陸地震」は 9 月 2 日を予定している。

(6) これまで首都圏(一都三県)と地方の隔年開催としていた学会大会について 2025 年大会を地方、2026 年大会を首都圏と順番を入れ替えた。

(7) 2025 年大会の開催地候補として鳥根県松江市で実施できるように調整した。

## 1-6 渉外委員会

(1) 日本地球惑星科学連合(JpGU)関係:JpGU 学協会長会議が 2023 年 12 月 5 日(火)にオンラインにて開催され、鈴木毅彦会長が出席した。また JpGU 学協会長会議幹事会が 2024 年 2 月 27 日にオンラインにて開催され、鈴木毅彦会長・北村晃寿副会長が出席した。2024 年大会(2024 年 5 月 26 日～31 日)のセッションとして単独開催した『第四紀:ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』(5 月 30 日 AM1・AM2)は総数 23 講演、共同開催した『活断層と古地震』(5 月 26 日 AM1・AM2・PM2)は総数 27 講演となった。その他 3 セッションを含めて 5 セッションを学協会セッションとして指定した。

(2) 防災学術連携体関係:防災学術連携体が 2024 年 1 月 31 日(水)に緊急開催した「令和 6 年能登半島地震・1 ヶ月報告会」にて、宍倉正展会員が「能登半島地震による海岸隆起と過去の隆起痕跡(海成段丘・生物遺骸)との関係」について報告した。2024 年 3 月 25 日に開催された「令和 6 年能登半島地震・3 ヶ月報告会」にて、北村晃寿副会長が「津波堆積物を用いた能登半島地震による浸水高の推定」について報告した。同日午後には開催されたシンポジウム「人口減少社会と防災減災」において、中塚 武会員が「歴史上の気候変動と人口変動の関係性から学ぶ」と題した講演を行った。また、2024 年 7 月 25 日に開催された同連携体 2023 年度総会に鈴木毅彦会長と担当委員の小荒井 衛会員が、2024 年 8 月 8 日に開催された第 5 回防災に関する日本学術会議・学協会・府省庁の連絡会に担当委員の小荒井 衛会員が、それぞれ参加した。さらに同連携体が 2024 年 8 月 22 日に開催した「第 6 回防災に関する学術会議、学協会、府省庁の連絡



会『令和6年能登半島地震災害における課題と教訓』にて、穴倉正展会員が学協会の取り組みとして「地形変化（長期的視点、海成段丘等）」の題目で報告した。

(3) 自然史学会連合関係：2024年6月29日にオンラインで開催された自然史学会連合の総会に、担当の林 竜馬会員が出席した。

#### 1-7 領域1「気候変動及び海洋の諸プロセス」

(1) 海洋コア岩相記載武者修行イベントを2024年2月1日～4日の期間に、高知大学海洋コア国際研究所にて開催した。参加者は8名であり、池原 研会員を講師として、加 三千宣会員、久保田好美会員、池原 実会員がサポートしながら実施した。

(2) JpGU2024のユニオンセッション「人新世・第四紀の気候および水循環（U-03）」を共催した。

(3) 2024年度東京大学大気海洋研究所の共同利用研究集会上に「古気候のモデルとデータの比較に関する研究集会」の開催提案をした。

#### 1-8 領域2「陸上の諸プロセス」

(1) 2021年7月24日・25日に開催した共催遠隔シンポジウム「陸域アーカイブから読む環境変遷と巨大災害：防災・減災に向けて」の内容を「第四紀研究」の特集号とする編集作業を進めた。（編集委員会報告事項参照）

(2) 「令和6年能登半島地震」に関する学会主催シンポジウムについて領域5とともに2024年7月7日に開催した。

#### 1-9 領域3「層序と年代基準」

(1) 2023年大会時に中止した専門巡検の代替として、領域3活動の巡検「入間川沿いに露出する下部更新統仏子層の観察」を、埼玉県入間市において2023年12月16日に実施した。納谷友規会員、水野清秀会員が案内者として、23名（案内者を含む）で行った。

#### 1-10 領域4「人類と生物圏」

(1) 2023年3月5日（日）に開催した公開シンポジウム「縄文時代早期人とその生態―群馬県居家以岩陰遺跡を中心に―」のプロシーディングスを「第四紀研究」特集号としてまとめるべく提案した。

(2) 2023年12月2日（土）に植生史学会・花粉学会と共催して公開シンポジウム「南九州の森、火山、ヒト」を開催した。林 尚輝・栞畑光博・三宅 尚・能城修一会員が話題提供者として講演を行った。

#### 1-11 領域5「現代社会に関わる第四紀学」

(1) 「第四紀とは」の改訂版パンフレットの作成作業を進めた。

(2) 「令和6年能登半島地震」に関する学会主催シンポジウムについて領域2とともに2024年7月7日に開催した。

#### 1-12 オンライン特別委員会

(1) 2023-2024年度の学会行事等をweb上のカレンダーを作成してアップした。

#### 1-13 学会設立70周年記念事業特別委員会

(1) 学会設立70周年に関する記念事業のひとつとして一般書籍を出すこととして、記念出版本に関する編集体制と出版計画を定めた。朝倉書店と交渉して、同書店による出版物として、図説『日本の自然史―第四紀の人と環境（仮題）』とタイトル付けした日本第四紀学会監修による普及啓発本とした。

(2) 須貝俊彦副会長を委員長として、各分野を網羅した編集委員による出版本編集委員会を立ち上げ、出版に向けての作業を開始した。2025年秋出版とするスケジュールを組み、項目や執筆者を選定して、2024年3月に執筆依頼を行った。

資料 2

日本第四紀学会

2023年度収支会計報告  
(2023年7月1日～2024年6月30日現在)

収入の部					(単位：円)
科目	予算額①	6月30日現在②	増減②-①	執行率②/①	摘要
会費収入	8,045,000	7,788,000	-257,000	96.8%	正会員858名、学生会員14名、賛助9社(2024年6月30日時点)
正会員会費収入	7,845,000	7,588,000	-257,000	96.7%	通常会員会費 7,463,000円 学生会員会費 75,000円 海外会員会費 50,000円
賛助会員会費収入	200,000	200,000	0	100.0%	20,000円×9社(10口)
誌代	600,000	590,572	-9,428	98.4%	講演要旨集、定期雑誌購入
別刷代・超過頁代収入	250,000	792,154	542,154	316.9%	第62巻第2～3号・第63巻第1～2号 別刷・超過頁・カラー代等
雑収入	150,000	217,363	67,363	144.9%	学術著作権使用料分配金, 2023年大会返金分
利子収入	1,000	328	-672	32.8%	預金利息
広告料収入	0	0	0		2023年大会予稿集広告無しのため
役員選挙積立金取崩収入	0	0	0		
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0		
名簿作成積立金取崩収入	0	0	0		
予備費積立金取崩収入	0	0	0		
収入合計	9,046,000	9,388,417	342,417	103.8%	
前期繰越金	22,578,486	22,578,486	0	100.0%	
合計	31,624,486	31,966,903	342,417	101.1%	

支出の部					(単位：円)
科目	予算額①	6月30日現在②	増減②-①	執行率②/①	摘要
会誌発行費	3,101,200	3,914,505	813,305	126.2%	第四紀研究第62巻第3～4号, 第63巻第1～2号
印刷費	1,500,000	2,387,220	887,220	159.1%	第62巻第3～4号, 第63巻第1～2号 (J-STAGE掲載費用含)
編集費	300,000	225,475	-74,525	75.2%	会誌編集費
編集人件費	1,201,200	1,201,200	0	100.0%	編集書記手当
別刷印刷費	100,000	100,610	610	100.6%	第62巻第3号, 第63巻第2号
会誌・会報発送費	600,000	464,784	-135,216	77.5%	会誌・通信発送関連費用
会報発行費	785,000	708,133	-76,867	90.2%	第四紀通信第30巻第3～4号, 第31巻第1～2号
印刷費	500,000	457,358	-42,642	91.5%	
編集費	75,000	98,675	23,675	131.6%	第四紀通信編集費
編集人件費	210,000	152,100	-57,900	72.4%	第四紀通信編集アルバイト代
学会HP運営費	1,670,000	97,620	-1,572,380	5.8%	HP更新アルバイト代, ドメインサービス, レンタルサーバー利用料
大会運営準備金	380,000	380,000	0	100.0%	2024年大会
巡検準備金	100,000	100,000	0	100.0%	2024年大会
講演会・シンポジウム費	50,000	0	-50,000	0.0%	
予稿集印刷費	0	0	0		
学会賞等顕彰費	60,000	30,140	-29,860	50.2%	学会賞等賞状作成費
会議費	150,000	146,090	-3,910	97.4%	年間Zoom利用料、議事録作成費用、執行部会会場費(5/30)
通信費	200,000	235,505	35,505	117.8%	会費WEB決済ご案内発送費, 会費請求書発送費, 事務通信費等
旅費・交通費	250,000	0	-250,000	0.0%	
印刷費	350,000	104,105	-245,895	29.7%	会費WEB決済ご案内印刷費, コピー代, 封筒作成費等
業務委託費	2,850,000	2,164,891	-685,109	76.0%	業務委託費(第1回・第2回・第3回), 会員マイページ関連費用
領域活動費	750,000	143,260	-606,740	19.1%	
領域1	150,000	127,360	-22,640	84.9%	海洋コア岩相記載武者修行イベント(2024年2月1日～4日)
領域2	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域3	150,000	15,900	-134,100	10.6%	巡検「入間川沿い」に露出する下部更新統仏子層の観察(2023年12月16日)
領域4	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域5	150,000	0	-150,000	0.0%	
INQUA対策費	0	0	0		
役員選挙費	0	0	0		
名簿作成費	-	-	-	-	
INQUA対策積立金繰入支出	500,000	500,000	0	100.0%	
役員選挙費積立金繰入支出	200,000	200,000	0	100.0%	
名簿作成積立金繰入支出	-	-	-	-	
予備費積立金繰入支出	0	0	0		
加盟学協会分担金支出	50,000	50,000	0	100.0%	防災学術連携体, 日本地球惑星科学連合, 自然史学会分担金
国際科学技術コンテスト協賛金支出	50,000	50,000	0	100.0%	国際地学オリンピック協賛金
支払手数料	0	257,619	257,619		会費Web決済関連支払手数料(りそな)
雑費	50,000	25,173	-24,827	50.3%	振込手数料, 名誉会員太田陽子先生供花代 等
予備費	200,000	0	-200,000	0.0%	
支出合計	12,346,200	9,571,825	-2,774,375	77.5%	
次期繰越金	19,278,286	22,395,078	3,116,792	116.2%	
合計	31,624,486	31,966,903	342,417	101.1%	

日本第四紀学会

貸借対照表  
(2024年6月30日現在)

(単位：円)

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
流動資産		流動負債	
郵便振替	376,804	未払費用	20,000
小口現金	938,353	前受会費	153,000
普通預金	20,883,841		
現金(事務局)	31,496	小計	173,000
未収会費	9,000	正味財産	
未収金	918,584	名簿作成積立金	0
仮払金	110,000	役員選挙積立金	200,000
		INQUA対策積立金	500,000
固定資産		予備費積立金	10,000,000
定期預金	10,000,000	次期繰越金	22,395,078
		(前期繰越金)	22,578,486)
		(当期収支差額)	-183,408)
		小計	33,095,078
合計	33,268,078	合計	33,268,078

財産目録  
(2024年6月30日現在)

資産の部		(単位：円)	
科目	摘要	金額	
郵便振替	郵便局	376,804	
小口現金	編集書記手許金	938,353	
普通預金	みずほ銀行早稲田支店	17,373,586	
	三井住友信託銀行本店営業部	206,861	
	りそな銀行新宿支店 (Web決済専用口座)	3,303,394	
現金	事務局手持ち金	31,496	
未収会費	WEB決済分	9,000	
未収金	誌代 (丸善収入)	218,240	
	別刷代・超過頁代収入	604,904	
	2023年大会返金分	95,440	
仮払金	マイページ会費決済機能構築費過払分	110,000	
流動資産合計		23,268,078	
定期預金	三井住友信託銀行本店営業部	10,000,000	
固定資産合計		10,000,000	
合計		33,268,078	

負債の部		(単位：円)	
科目	摘要	金額	
未払費用	自然史学会連合分担金	20,000	
前受会費	2024年度以降年会費	153,000	
合計		173,000	

正味財産の部		(単位：円)	
科目	摘要	金額	
名簿作成積立金	名簿作成積立金	0	
役員選挙積立金	役員選挙積立金	200,000	
INQUA対策積立金	INQUA対策積立金	500,000	
予備費積立金	予備費積立金	10,000,000	
次期繰越金		22,395,078	
	前期繰越金	22,578,486	
	当期収支差額	-183,408	
合計		33,095,078	

資料3

日本第四紀学会

会長 鈴木 毅彦 殿

2023年度会計監査報告書

日本第四紀学会 2023年度収支決算報告書(2023年7月1日~2024年6月30日)の監査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理等、正常適正に処理されていることを確認いたしました。


ここにご報告いたします。

以上

2024年8月6日

会計監査 藤原 治 

2024年8月6日

会計監査 植木 岳雪 

#### 資料4 日本学術会議 INQUA 小委員会報告

日本学術会議 INQUA 小委員会は、地球惑星科学委員会国際連携分科会に属している。2023年10月からの3年間は第26期となっている。INQUA に対する日本の代表機関となっており、INQUA の日本の分担金は、日本学術会議から支払われている。第26期第1回小委員会は2024年1月19日（金）にオンラインで開催され、第26期役員、委員会議事要旨の提出に関する委員長一任、分科会委員間のメールアドレス共有、第21回 INQUA 大会報告、第26期の活動方針などについて審議された。第2回 INQUA 小委員会は9月4日（水）に開催が予定されている。

#### 資料5 会則の一部改正について

##### 1. 会合の形式の明文化に関する事項（第3章総会 第8条）

会則第3章第8条について、新たに項を設け会合の形式について明文化する。

##### 2. 会長、副会長の議決権に関する事項（第4章役員および評議員会、領域、執行部会、委員会 第14条）

会則第4章第14条7項について、通常の評議員会と同様に電磁的方法による評議員会についても、会長、副会長が議決権を有することを明確にする。

##### 3. 正会員の会費に関する事項（第2章会員 第7条および付則）

下記のとおり、会則第2章第7条について、正会員の会費について学生会費適用者の減額、65歳以上の正会員に対する終身会員制度の設置のための改正を行うとともに、2024年度の会費納入とすべく付則事項を行う。

（背景・経緯）

近年、正会員数の減少（2017年から約15%減少）が著しい。正会員数の減少は今後の学会運営に支障をもたらし、ひいては学会の存続にかかわる可能性がある。執行部会および評議員会では、会員数の維持をはかるための制度設計について、予算シミュレーションの実施および、他学会の状況を分析しながら慎重に検討してきた。

その結果、これからの学会をリードする学生会費適用者が少ないこと、本務先退職等にあわせて退会する会員が多いことが判明した。今後の安定的な正会員数を維持していくため、2024年度から学生会費適用者（いわゆる学部生、院生）に対する会費減額および、会員終身制度を導入したい。

内容

- ① 学生会費適用者の会費を現行5,000円から2,000円とする。
- ② 65歳以上の正会員は、50,000円を一括納入した場合、終身会員とする。
- ③ 2024年度の会費納入から適用する。

なお、すでに会員にはメーリングリスト等を通じて、今年度の会費納入時期を遅らせることを周知している。また、自動決済を行っている会員に対しては9月以降に決済を実行する。学生会費適用者についての会費請求はすでに設定可能である。終身会員についてはシステム変更が必要となる。そのため、終身会員を希望する会員は事務局宛にメールを送っていただき、振込等の対応いただく。

資料 6

日本第四紀学会会則

(1956年4月29日, 総会にて決定)  
 (1995年8月26日, 総会で一部改正)  
 (2002年8月24日, 総会で一部改正)  
 (2004年8月28日, 総会で一部改正)  
 (2005年8月27日, 総会で一部改正)  
 (2009年8月29日, 総会で一部改正)  
 (2010年8月21日, 総会で一部改正)  
 (2011年8月27日, 総会で一部改正)  
 (2012年8月21日, 総会で一部改正)  
 (2014年9月7日, 総会で一部改正)  
 (2015年8月30日, 総会で一部改正)  
 (2016年9月18日, 総会で一部改正)  
 (2018年8月25日, 総会で一部改正)  
 (2019年8月24日, 総会で一部改正)  
 (2022年8月27日, 総会で一部改正)  
(2024年8月31日, 総会で一部改正)

第1章 総則

第1条 本会は日本第四紀学会 (Japan Association for Quaternary Research) という。

第2条 本会は第四紀を中心とする諸問題を, 関係各分野の協力により解明し, 第四紀学の進歩と普及をはかることを目的とする。

第3条 本会は第2条の目的を達成するために下記の事業を行なう。

- (1) 会誌, 第四紀通信誌, その他の出版物の発行, 電子媒体等による情報発信。
- (2) 学術講演会, 普及講演会, 談話会, 講習会, 野外見学会等の企画開催。
- (3) 研究の奨励および業績・功勞の表彰。
- (4) 内外の関連学協会との研究協力および連絡。
- (5) その他目的を達成するために必要な事業。

第4条 本会会則の変更は総会の議決によって行なう。

第2章 会員

第5条 本会は第四紀学に関心を持つ会員で組織する。会員は会誌等の配布を受け, 第3条に規定した事業を享受する, あるいは事業に参加する権利を有する。また, 会員は会則と倫理憲章を遵守する義務を負う。

第6条 会員は正会員, 名誉会員および賛助会員の3種とする。正会員および名誉会員は第2条の目的達成に寄与する個人とし, 賛助会員は第2条の目的を賛助する個人および法人とする。名誉会員は第四紀学について顕著な功績ある正会員の中から評議員会が推薦し, 総会の議決によって定める。

2. 会員になろうとするものは, 本会会則および倫理憲章に同意の上, 入会申込書を会長宛に提出し, 会長の承認を得なければならない。また, 本会を退会しようとする会員は, 会長宛に退会届を提出し, 任意に退会することができる。この場合未納会費

があるときはこれを全納しなければならない。

3. 1年以上、会費を滞納した会員は、評議員会の議を経て、除籍されることがある。

4. 不正行為等を行った会員に対し、会長は法務委員会の議に従い、除名できる。また、会員は不正行為等があったとする申し立てを行うことができる。

第7条 会員は総会の議決によって定められた会費を納めねばならない。会費は原則前納とし、年額、正会員は9000円（但し、学生・院生は52000円）、賛助会員は一口（20000円）以上とする。名誉会員は会費の納入を要しない。

2. 前項の規定にかかわらず、正会員のうち65歳以上で50000円を一括して納入した者については、毎年の会費を徴収しない。

3. 特別な事情がある場合、会費の減免をすることができる。

### 第3章 総会

第8条 総会は正会員を持って組織し、本会の基本方針を決定する。欠席した正会員の委任状を含み全正会員の10分の1以上の出席がなければ、成立しない。出席した正会員は2名以上の欠席した正会員の委任を受けることはできない。

2. 総会は各年度につき1回以上会長が招集し、以下を決定する。

(1) 前年度の活動報告・決算

(2) 新年度の事業計画・予算

(3) その他、本会の運営に関する重要な事項

3. 総会は、対面形式の他、オンライン会議システムを利用することができる。

第9条 名誉会員は総会に参加し、意見を述べることができる。

第10条 総会議長は、総会に出席した正会員の中から互選によって選出される。議長は議決権を有さないが、過半数によって議決される審議事項が賛否同数の場合にのみ、議決権を行使することができるものとする。

### 第4章 役員および評議員会、領域、執行部会、委員会

第11条 本会の役員は、会長1名、副会長2名、会計監査2名および役員選挙規程で定める数の評議員とする。

2. 役員の任期は選出された年の7月1日から1期2年とする。ただし、会計監査は2年目の会計監査報告が終了した時点までとする。

3. 会長および副会長はそれぞれ合算して2期（4年）を超えて就任することはできない。評議員は7期以上、会計監査は2期以上、連続して就任できない。評議員は原則として3期以上連続、合算して7期以上執行部会員に就任することはできない。

第12条 会長、副会長、評議員は正会員の中から選挙によって選出される。会計監査は会長、副会長、評議員を除く正会員の中から評議員会において選出される。

2. 副会長の任期を半年以上残した時点で欠員が生じた場合、評議員から補充することができる。
3. 評議員の任期を半年以上残した時点で欠員が生じた場合、その領域の次点者をもって補充することができる。
4. 執行部会員および会計監査の任期を半年以上残した時点で欠員が生じた場合、評議員会の議を経て補充することができる。

第 13 条 会長は本会を代表し、会務を統括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。

第 14 条 評議員会は会長、副会長と評議員によって構成され、会則第 2 条に定める本会の基本方針に基づき、本会の運営に関する案件を審議決定する。また、本会会則の施行に係わる細則（規程、内規など）を決定する。

2. 評議員会は会長・副会長・評議員総数の 3 分の 1 以上の出席（委任状を含む）をもって成立する。ただし出席した評議員は 2 名以上の欠席した評議員の委任を受けることはできない。
3. 評議員会議長および議長欠席の場合の議長代理は、評議員の互選によって年度単位で執行部会員を除く評議員から選出される。議長は議決権を有しないが、過半数によって議決される審議事項が賛否同数の場合にのみ、議決権を行使することができるものとする。
4. 会長経験者および名誉会員は、評議員会に出席し、意見を述べることができる。
5. 評議員会は各年度につき 2 回以上会長が招集する。
6. 会長が必要と認める場合には、評議員以外の者を評議員会に出席させることができる。
7. 電磁的方法をもって評議員会を開催し、2 分の 1 以上の返信をもって成立させることができ、審議に加わった会長、副会長、評議員の過半数が同意の意思表示をしたときは、議決することができる。

第 15 条 本会に第四紀学の研究テーマに関連した複数の領域を設定する。正会員はいずれかの領域に所属するものとする。

2. 各領域に領域代表と領域幹事をおく。領域代表は各領域の評議員の互選によって決定する。そのほかの評議員は各領域の幹事となり、領域代表とともに領域に関わる事業を行う。
3. 領域の構成の変更には総会の承認を必要とする。

第 16 条 執行部会は、会長、副会長、領域代表及び評議員が務める主要な常設委員会委員長により構成され、本会の運営に関する会合を定期的で開催する。執行部会は、庶務、会計、編集、行事、広報、渉外などの会務を執行し、各年度につき 1 回以上、評議員会・総会に会務の執行状況を報告し、また、必要な案件を提案する。

2. 会長は必要に応じて執行部会員以外の者を執行部会に出席させることができる。



第17条 本会の会務を執行するための常設委員会と特別委員会を置く。

2. 常設委員会には、庶務、会計、編集、行事、広報、渉外、法務がある。常設委員会委員の任期は2年間とする。庶務、会計、編集、行事、広報、渉外の各委員会は、委員長を評議員から選出し、そのほかの委員は各領域から候補者を推薦して、評議員会において決定される。法務委員会委員は、会長が候補者を推薦し、評議員会において決定される。
3. 特別委員会として、選挙管理、顕彰、名誉会員選考、大会実行に関する委員会をおく。評議員会は、必要に応じ、期限を定めたその他の特別委員会を置くことができる。

## 第5章 会計

第18条 本会の経費は、会費、寄付金、補助金等による。

第19条 本会の会計年度は毎年7月1日に始まり、翌年の6月30日に終わる。

第20条 本会の会計は毎年総会の前に監査を受けるものとする。

## 第6章 細則

第21条 本会会則の施行に関わる細則は別に定める。

付則1 本会事務局は東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号（〒169-0072）新宿ラムダックスビルに置く。

付則2 本会の創立年月日を 1956 年 4 月 29 日とする。

付則3 本会則は 2022 年 9 月 31 日より施行する。

付則4 第7条1項で定めた会費については、2024年度の会費から適用する。ただし、例外的に2024年度の会費は年度内に納入とする。

付則5 第7条2項で定めた会費については、2024年度の会費から適用する。

## 資料7 2024年度事業計画

### 1-1 庶務委員会

- (1) 総会・評議員会・執行部会の開催に関連する業務を行う。
- (2) 入会・退会者の確認を行うとともに会員名簿の管理を行う。
- (3) 学会賞・学術賞・若手学術賞の受賞者選考および論文賞・奨励賞の受賞者選考に関する業務を行う。
- (4) 選挙管理委員会を立ち上げ、関連する業務を行う。
- (5) 転載許可申請への対応を行う。
- (6) 学会・シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行う。
- (7) 顕彰規程や転載許可申請書等の改正・見直しに関する業務を行う。各受賞者への記念品、副賞、会員への研究助成などに関するアンケートを実施する。
- (8) 歴代大会実行委員、巡検案内者、講習会講師、INQUA 役員・委員などのリストを整理し、顕彰関係

の基本資料に加える。

- (9) 学会資料の電子化、保存方法について検討する。
- (10) 将来における庶務委員会の分割化や書記雇用について検討する。
- (11) その他学会活動に関する庶務業務を行う。

### 1-2 会計委員会

- (1) 会計に関する承認業務を行う。
- (2) 2024 年度総会において、2023 年度の収支決算を報告し、2024 年度の予算案を提案する。
- (3) 会計監査を受ける。
- (4) 現状の問題点と長期的な財政事情を考慮し、会計の観点から学会の運営を検討する。
- (5) 在庫物品の管理を行う。学会誌は出版から 5 年間は 20 冊を保管し、それ以降は 10 冊のみを保管する。オンラインで公開されていない要旨集を PDF 化し、各号 10 冊のみを保管する。
- (6) 会議等での旅費（交通費）支給の基準となる内規を作成する。
- (7) 物価高の社会情勢を考え、アルバイト（書記）の時間給単価値上げを検討する。

### 1-3 編集委員会

- (1) 「第四紀研究」第 63 巻第 4 号、第 64 巻第 1 号、2 号を編集し、定期刊行する。また、J-STAGE を通じて電子ジャーナルとしての刊行を行う。必要に応じて、電子付録を J-STAGE Data で公開する。
- (2) 「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。
- (3) 論文別刷 50 部を希望著者には無料配布することを検討する。

### 1-4 広報委員会

- (1) 「第四紀通信」第 31 巻第 3 号、4 号、第 32 巻第 1 号、2 号を編集し、発行する。
- (2) 「第四紀通信」各号の電子版（PDF 版）を、それぞれ発行前月の下旬に日本第四紀学会ホームページに掲載する。各ファイルを保存し、アーカイブ化を継続する。
- (3) 日本第四紀学会ホームページを管理し、広報、情報提供、アウトリーチ活動等を行う。
- (4) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて各種情報提供等を行う。
- (5) 各委員会および各領域のメーリングリストの管理を行う。
- (6) 学会ホームページリニューアルを行う。

### 1-5 行事委員会

- (1) 日本第四紀学会 2024 年大会を 2024 年 8 月 29 日（木）～9 月 2 日（月）に、東北大学青葉山北キャンパス（宮城県仙台市）で開催する。
- (2) 2024 年大会における若手・学生発表賞の審査委員会の立ち上げ、審査に関する業務を行う。
- (3) 2025 年大会（会場は島根大学、日程：2025 年 8 月 29 日（金）～9 月 1 日（月）予定）の準備を関係者と調整して行う。
- (4) 学会賞・学術賞受賞記念講演会を開催する。

### 1-6 渉外委員会

- (1) 日本地球惑星科学連合において日本第四紀学会の貢献を高めるために、JpGU2025 においても、『第四紀：ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』と、『活断層と古地震』を第四紀学会としてセッション提案及び開催し、第四紀学会員の発表の場を用意するとともに、第四紀学に関連するセッションとの連携・共催を積極的にすすめる。
- (2) 防災学術連携体が主催するシンポジウムや企画に対して、日本第四紀学会としてのプレゼンスを高めるために積極的に参画する。
- (3) 自然史学会連合、地学オリンピック、ジオパーク学術支援連合等、国内関連学協会との連携を高めて

いく。

#### **1-7 領域 1「気候変動及び海洋の諸プロセス」**

- (1) 気候変動及び海洋の諸プロセスに関するシンポジウムや巡検を企画・開催する。
- (2) 第 2 回海洋コア岩相記載武者修行イベントを 2024 年 11 月 16 日～19 日に高知大学海洋コア国際研究所にて開催する。
- (3) 「人新世の科学的根拠とその否認について」の解説文を公開する。
- (4) JpGU2025 において、関連セッションを開催する。

#### **1-8 領域 2「陸上の諸プロセス」**

- (1) 領域 5 との共同主催として「令和 6 年能登半島地震に関するシンポジウム」を開催する。
- (2) 陸上の諸プロセスに関するシンポジウムや巡検を企画・開催する。
- (3) JpGU2025 大会に向けて、陸上の諸プロセスに関連したセッションの提案を検討する。
- (4) INQUA TERPRO コミッションの研究プロジェクトに領域メンバーの参加をうながす。

#### **1-9 領域 3「層序と年代基準」**

- (1) 領域 1 とともに、「人新世の科学的根拠とその否認について」の解説文を公開する。
- (2) 層序と年代基準に関するシンポジウムを企画・開催する。
- (3) 日本国内の第四系標準層序地域についての情報をホームページに掲載する。

#### **1-10 領域 4「人類と生物圏」**

- (1) 領域 4 に関係するシンポジウムを企画・開催する。

#### **1-11 領域 5「現代社会に関わる第四紀学」**

- (1) 領域 2 との共同主催として「令和 6 年能登半島地震に関するシンポジウム」を実施する。
- (2) 本学会の新パンフレットを作成する。

#### **1-12 オンライン特別委員会**

- (1) オンラインシステムの効率化についての検討を進める。

#### **1-13 学会設立 70 周年記念事業特別委員会**

- (1) 記念出版本に関する調整を進める。
- (2) 関連行事（イベント）の検討を行う。

資料 8

日本第四紀学会

2024年度予算案  
(2024年7月1日～2025年6月30日)

収入の部

(単位：円)

科 目	2023年度予算額①	6月30日現在②	2024年度予算案③	摘 要
会費収入	8,045,000	7,788,000	7,796,000	正会員841名(海外5名含)、学生会員11名、賛助9社(2024年7月1日現在)
正会員会費収入	7,845,000	7,588,000	7,596,000	通常会員会費 ¥7,524,000 学生会員会費 ¥22,000(新会費2000円*11名) 海外会員会費 ¥50,000
賛助会員会費収入	200,000	200,000	200,000	20,000円×9社(10口)
誌代	600,000	590,572	600,000	定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過頁代収入	250,000	792,154	250,000	第63巻第3～4号・第64巻第1～2号 別刷・カラー代等
雑収入	150,000	217,363	150,000	JST(科学技術振興機構)等
利子収入	1,000	328	500	預金利息
広告料収入	0	0	0	2024年大会予稿集広告なし
役員選挙積立金取崩収入	0	0	200,000	2025年度役員選挙
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0	
予備費積立金取崩収入	0	0	0	
収入合計	9,046,000	9,388,417	8,996,500	
前期繰越金	22,578,486	22,578,486	22,395,078	
合計	31,624,486	31,966,903	31,391,578	

支出の部

(単位：円)

科 目	2023年度予算額①	6月30日現在②	2024年度予算案③	摘 要
会誌発行費	3,101,200	3,914,505	3,301,200	第四紀研究第63巻第3～4号・第64巻第1～2号
印刷費	1,500,000	2,387,220	1,700,000	第63巻第3～4号・第64巻第1～2号(J-STAGE掲載費用含)
編集費	300,000	225,475	300,000	
編集人件費	1,201,200	1,201,200	1,201,200	編集書記手当
別刷印刷費	100,000	100,610	100,000	
会誌・会報送費	600,000	464,784	550,000	
会報発行費	785,000	708,133	800,000	第四紀通信第31巻第3～4号・第32巻第1～2号
印刷費	500,000	457,358	500,000	
編集費	75,000	98,675	90,000	第四紀通信編集費(編集ソフト契約料等)
編集人件費	210,000	152,100	210,000	第四紀通信編集アルバイト代
学会HP運営費	1,670,000	97,620	1,670,000	HP更新アルバイト代、ドメインサービス・レンタルサーバー利用料、HP改修費用150万円
大会運営準備金	380,000	380,000	380,000	2025年大会運営準備金
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	2025年大会分
講演会・シンポジウム費	50,000	0	50,000	
学会賞等顕彰費	60,000	30,140	500,000	賞状作成費・副賞・関連費用等
会議費	150,000	146,090	100,000	会場費、Zoomライセンス利用代等
通信費	200,000	235,505	200,000	会費請求書送付費、事務通信費等
旅費・交通費	250,000	0	250,000	執行部会・委員会等交通費
印刷費	350,000	104,105	350,000	学会専用封筒、コピー代
業務委託費	2,850,000	2,164,891	2,300,000	事務委託費、会員マイページ関連費用
領域活動費	750,000	143,260	750,000	15万円*5領域
領域1	150,000	127,360	150,000	
領域2	150,000	0	150,000	7月7日シンポジウム：43,123円支出済
領域3	150,000	15,900	150,000	
領域4	150,000	0	150,000	
領域5	150,000	0	150,000	7月7日シンポジウム：43,123円支出済
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	0	0	400,000	委員会交通費、選挙会告印刷費、マイページ選挙システム運用費、発送事務局費用
INQUA対策積立金繰入支出	500,000	500,000	500,000	
役員選挙費積立金繰入支出	200,000	200,000	200,000	
予備費積立金繰入支出	0	0	0	
加盟学協会分担金支出	50,000	50,000	50,000	日本地球惑星科学連合、自然史学会分担金、防災学術連携体
国際科学技術コンテスト協賛金支出	50,000	50,000	50,000	国際地学オリンピック協賛金
支払手数料	0	257,619	300,000	WEB決済手数料
雑費	50,000	25,173	50,000	振込手数料等
予備費	200,000	0	300,000	70周年記念事業準備金等
支出合計	12,346,200	9,571,825	13,151,200	
次期繰越金	19,278,286	22,395,078	18,240,378	
合計	31,624,486	31,966,903	31,391,578	

## 資料 9

## 2023-2024年度役員・委員会委員等一覧（下線は更新部分）

- 会長 鈴木毅彦
- 副会長 北村晃寿, 須貝俊彦
- 会計監査 藤原 治, 植木岳雪
- 領域 1 領域代表 横山祐典  
領域幹事 阿部彩子, 池原 実, 久保田好美, 加 三千宣, 平林頌子
- 領域 2 領域代表 吾妻 崇  
領域幹事 石村大輔, 奥村晃史, 苅谷愛彦, 久保純子, 小松原純子,  
佐藤善輝, 白井正明, 堀 和明
- 領域 3 領域代表 里口保文  
領域幹事 青木かおり, 卜部厚志, 岡田 誠, 納谷友規, 水野清秀
- 領域 4 領域代表 海部陽介  
領域幹事 井上 淳, 工藤雄一郎, 齋藤めぐみ, 中塚 武, 那須浩郎,  
林 竜馬, 百原 新
- 領域 5 領域代表 小荒井 衛  
領域幹事 石原与四郎, 木村英人, 前杢英明, 三田村宗樹, 山田和芳
- 庶務委員会 委員長 山田和芳  
委員 オブラクタ・スティーブン, 佐藤善輝, 水野清秀,  
工藤雄一郎, 前杢英明
- 会計委員会 委員長 堀 和明  
委員 平林頌子, 納谷友規, 齋藤めぐみ, 小荒井 衛
- 編集委員会 委員長 苅谷愛彦  
委員 加 三千宣, 安江健一, 青木かおり, 宮入陽介, 井上 淳,  
岩瀬 彬, 石原与四郎
- 広報委員会 委員長 那須浩郎  
委員 田村 亨, 石村大輔, 竹下欣宏, 三田村宗樹
- 行事委員会 委員長 池原 実  
委員 久保純子, 西澤文勝, 中塚 武, 木村英人
- 渉外委員会 委員長 白井正明

委員 石輪健樹 (JpGUプログラム委員), ト部厚志 (JpGU環境災害対応委員), 林 竜馬 (自然史学会連合), 小荒井 衛 (防災学術連携体), 植木岳雪 (ジオパーク), 小森次郎 (地学オリンピック)

学会賞選考委員会 (2023年度) 委員長 鈴木毅彦

委員 齋藤文紀, 久保純子, 百原 新, 小野有五

(2024年度) 委員長 鈴木毅彦

委員 齋藤文紀, 久保純子, 百原 新, 三田村宗樹

論文賞選考委員会 (2023年度) 委員長 岡田 誠

委員 澤井祐紀, 阿部彩子, 奥村晃史, 黒木貴一

(2024年度) 委員長 前杢英明

委員 奥野純一, 菅沼悠介, 吾妻 崇, 齋藤めぐみ

評議員会議長 (2023年度) 三田村宗樹 (2024年度) 水野清秀

議長代理 (2023年度) 水野清秀 (2024年度) 井上 淳

オンライン委員会 委員長 久保田好美

委員 小松原純子, 下岡順直, 中塚 武, 目代邦康

学会設立70周年記念事業委員会 委員長 鈴木毅彦

委員 池原 実, 須貝俊彦, 北村晃寿, 山田和芳

選挙管理委員会 (2024年度)

委員 酒井恵祐, 高橋尚志, 西澤文勝, 星野安治, 岩本直哉

名誉会員候補者選考委員会 (2023年度のみ) 委員長 小岩直人

委員 加 三千宣, 兵頭政幸, 江口誠一, 前杢英明

法務委員会 委員長 奥村晃史

委員 三浦英樹, 水野清秀, 近藤 恵, 三田村宗樹

以上

### ◆【重要】会費に関するお知らせ

2024年度から年会費について、学生会費適用者（学生会員）の年会費減額及び、いわゆる終身会員制度の導入の大きな変更を行いました。

- ①大学生・大学院生など学生会費適用者の会費が現行 5,000 円から 2,000 円に減額になります。
- ② 65 歳以上の正会員については通常 9,000 円の年会費となっていますが、50,000 円を一括納入した場合、以降の年会費を支払うことなく、会員資格を有することができます。

※②に該当するいわゆる終身会員を希望される正会員は第四紀学会事務局まで、一括納入希望の旨を、メールもしくは郵送にてお伝えください。追って事務局から支払い方法などについてのご案内をします。連絡前のお振込み等はおやめいただきますようお願いいたします。

### ◆役員選挙に向けての領域変更手続きと 2024 年度会費納入のお願い

2025-2026 年度の会長・副会長・評議員を決める役員選挙が 2025 年 3～4 月頃実施されます。各領域の評議員の定数は、2025 年 2 月 1 日時点での各領域に所属する正会員の数によって決定されます。日本第四紀学会領域規程 (<http://quaternary.jp/intro/rules/ryouiki.html>) 第 4 条により、ご自身の所属領域を変更したい方は、2024 年 12 月 31 日までの期間、変更することができます。この期間を逃すと、領域を変更できるのは 2 年後になります。領域を変更したい方は会員マイページからご自身で変更をしていただきますようお願いいたします。なお、日本第四紀学会事務局（連絡先は本通信最後のページ参照）宛としてメールまたは郵送でも変更依頼をすることもできます。領域未指定の会員は、実質的に選挙権・被選挙権ともありません。ぜひとも領域の選択をお願いします。また、所属先や自宅住所などの変更があった方も、会員マイページを利用して会員情報の更新をすることができます。

会員マイページから領域など個人情報を変更する方法は以下の通りです。日本第四紀学会ホームページ (<http://quaternary.jp>) トップ右横にある「会員マイページ」バナーから入室できます。会員 ID 番号（学会誌・会報が入った封筒の会員宛名の下に書かれている 10 桁の数字）とパスワードを入力し、ログインしてください。次に「会員情報更新」→「会員情報の変更」ボタンをクリックして、修正ください。会員 ID 番号が不明の方は、第四紀学会事務局あてにご自身の氏名、メールアドレス、第四紀学会会員であることを証明する所属先・現住所などの情報を記して、お問い合わせください。会員 ID 番号とパスワードは各自で控えていただくようお願いいたします。

また、2025 年 2 月 1 日時点で会費が納入されていないと、正会員は役員選挙規程第 15 条に基づき、この役員選挙の選挙権並びに被選挙権が与えられません。2024 年度会費未納入の方は遅くとも 2025 年 1 月までに納入をお願いいたします。会費の納入状況は会員マイページで確認することができます。役員選挙の投票は、会員マイページ内から行います。なお、会員マイページでは、年会費の支払い、会員名簿検索をはじめ総会資料なども確認できます。ご活用ください。

(庶務委員会)

★★★ 第四紀学会に情報をお寄せください ★★★

日本第四紀学会では、第四紀通信のほか、メーリングリスト (ML)、ホームページ (HP) を用いて情報発信をしております。メール本文に配信内容のタイトルと簡単な情報を書いて広報委員会アドレス (jaqua-koho(at)quaternary.jp) へご投稿ください。

情報発信の手段として、ML の積極的な使用をお願いします。ML へのご投稿についての詳細は、第四紀通信第 29 巻第 4 号の巻末をご覧ください。HP (<http://quaternary.jp/>) でも閲覧可能です。

第四紀通信には主催・後援イベントなど第四紀学会として会員に広く周知する必要があると認められる情報を、HP には主催・後援イベントなどのほか「公募・助成」情報等を掲載します。詳しくは広報委員会アドレス宛に、個別にご相談ください。

日本第四紀学会広報委員会

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail : daiyonki(at)shunkosha.com 電話 : 03-5291-6231 FAX : 03-5291-2176